

日本考古学協会セッションアフタートーク 「考古学・埋蔵文化財情報のオープン化のなぜ？誰が？どうやって？」

今井邦彦（朝日新聞社）・高田祐一（奈良文化財研究所）・中尾智行（文化庁）・
中村耕作（國學院大學栃木短期大学（当時））・野口淳（奈良文化財研究所（当時））・
樋上昇（愛知県埋蔵文化財センター）・堀木真美子（愛知県埋蔵文化財センター）・
三好清超（飛騨市教育委員会）・

After-Session Discussion of the Japanese Archaeological Association:
The Who, How, and Why of Open Archeological Data

Higami Noboru (Aichi Prefectural Center for Archeological Operations)
Horiki Mamiko (Aichi Prefectural Center for Archeological Operations)
Imai Kunihiro (The Asahi Shimbun Company)
Miyoshi Seicho (Hida City Board of Education)
Nakamura Kousaku (Kokugakuin Tochigi junior collage)
Nakao Tomoyuki (Agency for Cultural Affairs, Government of Japan)
Noguchi Atsushi (Nara National Research Institute for Cultural Properties)
Takata Yuichi (Nara National Research Institute for Cultural Properties)
・オープン化／Openness・SNS／Social media・博物館／Museums
・デジタルリテラシー／Digital literacy

2021年6月7日 Zoomにてオンライン開催



野口 本日は2021年5月23日に専修大学のオンラインで開催された日本考古学協会のセッションの「オープンサイエンス時代の考古学・埋蔵文化財情報」のアフタートークを行ないました。当日は討論の時間が20分しかなく十分議論できなかったもので、あらためて参加者一同で対談して議論を深めることを目的とします。内容は文字起こしの上、公表するこ

とになっていますので、よろしくお願いします。

また当日コメントいただいた中尾さんに、われわれ発表者では不足していた重要な論点をつけ加えていただいたのでお招きしています。当日参加・視聴いただいていた朝日新聞の今井さんが、Twitter（ツイッター）等で反応を示していただいていたので、樋上さん経由でお願いしたところ、快くご参加の了承をいただきました。

簡単に最初の論点と共有すべき事項だけ、整理しておきたいと思います。（以下、投影資料を補足）

全体論点

- なぜオープン化が必要と考えるのか？
各個人の考え、所属組織や担当業務との関係
- オープン化は誰のためか？
受益者の想定と具体的な便益の例示
- ウィズコロナ、アフターコロナとの関連
- 市民参加、シチズンサイエンス、シビックテック

などへの視点

- デジタル情報、インターネット利用の経験値・リテラシーの世代差
※共有しておくべき立ち位置：前向きにソリューションを見つけるための議論を
- 現状の問題点を列挙するだけ、「〇〇だから難しい」で終わらせる発言はNG
- 論点、対象、なぜ議論するのかという目的、何のため・またはどのようになればよいという目標を明確にすることを意識する
- 樋上・堀木、中村、三好報告に対してどのように実践に至ったのか、途中にあった課題と解決方法を整理報告してもらう

野口 はじめになぜオープン化が必要と考えるのかについて、それぞれ個人の考えと、可能な方は所属組織や担当業務との関係から整理してお話をいただきます。次に、オープン化は誰のためなのか、その具体的な受益者の想定、あるいはどのような便益が得られるのかについて、可能ならばお話ししてください。協会のときにはそこまで踏み込んだお話ができませんでしたが、新型コロナウイルス感染症の影響をまだ受け続けている昨年度・今年度における状況とそれ以後のウィズコロナ・アフターコロナとの関連についても議論したいと思います。これは中尾さんのほうからパブリックアーケオロジー等の観点でつけ加えていただいたものですが、市民参加、シチズンサイエンス・シビックテックなどとも呼ばれるものとの関連について、もし追加があれば。論点の5つめは、個人でつけ加えていただくよりも、後ほどクロストークの形で意見交換しながら考えていったほうがよいと思います。

また今回、実はいわゆる若者、ミレニウム世代・Z世代と呼ばれる人たちがここに全くいないので、想像で話をするしかないですが、デジタル情報やインターネット利用の経験値によるリテラシーの世代差が今日話しているようなこととどう関係してくるのかも、少し話をしていきたいと思います。

そのときに、まず前向きに解決策を見つけるための議論をしましょうという前提でお願いいたします。つまり今、こういう問題点に直面しています、こういう問題があるからできない、という話を今日は特にする必要はなくて、その先の話を全員でしていこうと思います。また、なぜこれを今取り上げるのかという目的、それは何のため誰のためなのか、どうすればよいと思っているのか、つまり具体的にこうしたいという目標を明確にすることを意識してお話しただけのようにお願いいたします。樋上さん、堀木さん、中村さん、三好さんはもう具体的な実践をされている中で、現時点までに到達している実践にどのように至ったのか、途中にあった課題や解決方法についても可能な範囲で整理報告していただければと思います。進め方ですけれども、今日この人数でクロストークなのでマイクは常時オンにしておいて、適宜発言していただこうと思います。

それでは、冒頭に今井さんからコメントあるいは具体的な質問で口火を切っていただけますでしょうか。

今井 朝日新聞西部本社の福岡報道センターにおります今井と申します。福岡は3年目ですが、大阪本社では2003年ごろから文化財担当として、関西を中心に歴史・考古学の取材を長くしておりました。朝日新聞では7、8年ほど前から、Twitterを積極的に使って記者からの情報発信をしていこうという話になり、私も始めました。最初は社命で半ば仕方なく、という感じでやっていましたが、始めてみるとけっこう反応があって、だんだんと情報提供をするのが面白くなり、いつの間にかフォロワーも2万を超えていました。最近、ツイートに対して印象的な反応があったケースがふたつほどありましたので、ご紹介をさせていただこうと思います。

一般利用者の一次情報への関心

まずひとつめ。4月の末ぐらいに俳優の佐藤二朗さんがやってらっしゃるNHKの「歴史探偵」という番組で、飛鳥の八角墳がテーマになりました。今年の正月ごろに掘っていた中尾山古墳の話題ですけ

ど、宮内庁が保管している金銅製四環壺が、中尾山古墳出土のもの、要するに文武天皇の骨蔵器だったんじゃないか、という説が紹介されました。しかし、今回の調査ではどうもサイズが違うようだ。あの石室の隙間から出すことはできないだろうと否定されたんです。そのとき、金銅壺の年代について、表面に彫られた鳳凰の絵のデザインから、遣唐使再開以後のものだろうという見解を紹介されていたので、あっこれ面白いなと思ってネットで調べてみました。すると奈文研のリポジトリに、CTを使ってこの鳳凰の絵についての報告が載っていたので、そのリンクも番組の後でツイートしました。番組が11時過ぎに終わるので、ツイートしたのも日付が変わった後ぐらいだったんですけども、それから翌日までの間に、リツイートが80件、“いいね”が300件くらいあったので、ちょっとびっくりしたんですね。

これまでも、読者の「一次情報」への関心を感じることがありました。だいたい、関西で文化財の報道発表があると、テレビでは午後5時や6時のローカルニュースで流れるので、新聞社もなんとかそれまでにネットにニュースをあげて、Twitterでリンクを貼ると、すごく反応がいいんです。さらにその

時までには自治体発表の報道資料がネットに上がっている場合は、そこにもリンクしておくと、これにもかなりの反応がありました。一般のファンでもそういう一次情報への関心は高いんだな、と思っていたのですが、今回の番組についてつぶやいたケースでも、それを感じました。

博物館での写真撮影

それからもう一件。今取材している博物館での写真撮影に関しても、関心の高さに驚きました。九州国立博物館のホームページに、この4月から常設展示の文化交流展示室で写真撮影を解禁したという話題がごく小さく出ていたんです（九州国立博物館写真撮影について <https://www.kyuhaku.jp/news/news-210406.html>）。僕も最初は気がつかなくて、ゴールデンウィーク前になって「あっ、こんなことがホームページに載っているな」と思って、そのツイートを何気なくしたら、リツイート270件、“いいね”が440件という、思わぬ反応がありました。それで驚いて、今度は実際に博物館に行って写真も撮ってきて、それをもう一回あげたら、そちらにもリツイートが320、“いいね”が700と、最初の紹介ツ



<https://twitter.com/imaikuni/status/1387429584447021061>



<https://twitter.com/imaikuni/status/1393183681045360642>

イトよりもさらに大きな反応がありました。やっぱり、博物館に行ったら何が見られるか、どういふものを自分が撮って、おみやげとして持って帰れるか、などにも関心がすごく高いと思いました。

そうした一般利用者の関心に対して、博物館・研究機関に伝えていただくことが、今後すごく重要になってくるだろうということは、Twitter から見ていただけかもしれませんが、私が体験から思っているところです。

ただ、オープンソースになっている一次情報の中でも、報告書はすごく情報量が多いとも感じます。たぶん、歴史に関心を持っている方でも、その報告書のどこを読めば自分が知りたいことが書いてあるのかは、すぐにはわからないかもしれません。一般の人にとっては、むしろポイントだけを押さえた現地説明会資料などが公開されているほうがわかりやすいのかな、とも思います。

私は単身赴任中で、自宅はずっと奈良にあります。「全国遺跡報告総覧」は奈文研がとりまとめているんですが、全国的な関心が高い奈良県立橿考研と明日香村は、未だにPDFの形で報告書の公開はしていません。そういうと、なかなか情報を得にくいように思えるのですが、明日香村と橿考研のページでは、一般向けの現地説明会資料が過去20年分ぐらい公開されているんです。比較的アクセスしやすいし、内容もわかりやすいので、非常に役に立っているんじゃないかと。専門的な報告書以外の、そうした一般向けの情報についても、アクセスしやすいものがあるとよいかなとは感じています。

とりあえず私のコメントや感想は以上です。

知識レベルに合わせた誘導が必要か？

野口 ありがとうございます。重要な論点がいくつありまして、ひとつめは中尾山古墳関連のところでの、一般の人でも一次情報にアクセスしたい、報道等でかみ砕かれたプレスリリースじゃなく、もっと踏み込んだ内容を知りたい人が多いんじゃないかということですね。ただ報告書だとちょっと専門的

すぎるので何を出すのかという話で、基礎データの公開というのと地続きということですかね、今井さんの印象としては。

今井 そうですね、地続きですね。情報を求めてくる人の求める情報のレベルは違うと思うんですけど、たぶん入口は同じところから入ってくるとは思うので、それをうまいことその人の関心や知識のレベルに合わせて誘導していけるような形になっていればいいんだろうとは思っています。

野口 そもそもオープン化の前提としてできる限り広くオープンにした上で、利用者側が選択できるようにするというのがむしろ重要だなということで、当日もそういう話をしていたのに、なぜ一般普及の話と基礎データの公開の話を分けて考えましようと思案をしてしまったのかというのを、反省しなおしたところです。ですので、報告書だけでなく現説資料やいろんな段階のものがあれば、それぞれで自分はこれがよいというのが選べるという、おそらくそういう考え方ですね。

今井 はい。

中尾 この手の話っていろんな観点があって、もちろん基礎データや一次情報にアクセスしたい人もいらっしゃるんですけど、たぶん今井さんのツイートに反応した人を想像すると、いま研究が進んでいるライブ感のようなものに魅力を感じている人も多いのではないかと思います。

CT調査の成果が今まさにこういうふうに進んでいますって話の中で、実はこういう研究報告があつてねっていう話になると、自分もその研究の一端に関われるような、参加している感覚があると思うんです。どちらかというと味付けのされていない基礎データに飢えているって話ではなくて、そのときそのときで生のデータに触れたい、裏側を見たい、いろんな価値付けがあつてアクセスしているような気がしますね。

九博の件にしても、写真撮影が可能になった話は、そこに課題意識や関心があつた方が今までいて、ようやく写真撮影可能になったんだってことで

“いいね”をつけたかもしれないし、そういう情報をいち早く手に入れたアーリーアダプターの気分を味わいたい人もいるかもしれない。いろんな価値観のもとでアクセスしているのではないか。ですので、単純に基礎データをオープンして一般の方に使えるようにしないとねという話だけではないのかなとちょっと思いました。

野口 なるほど。私は逆で、むしろこちら側で斟酌して取捨選択する必要はないんじゃないかと。報告書を出しておけば、報告書を見てこれはちょっと難しいなと思った人は別を選べるという選択肢を用意しておくべきなのかなと受け取りました。そのあたり、また後で議論していきたいと思います。

次の九博の写真のところはすごく重要で、ワーキンググループを立ち上げてきちんと検討したということですが、Twitter 上でも繰り返し何遍も同じことをループのように議論はされていますけど、多くの場合否定的な見解はこれの真逆というか、同じことから逆の結論を出していますね。

要は寄託資料や著作権を有する資料と一緒に配置されているので、どれが撮影可でどれが不可かが切り分けづらいから全部不可という言い方をしているんじゃないかなと思うんです。九博のこの取り組みは管理する側が便利のように全部不可にするのではなくて、きちんと問題点を検討されたうえで結論を出したという点で、ぐるぐる回り続けている SNS や関係者の間の議論に対して、一石を投じるどころか、かなり重たいものなのかなと思っています。樋上さんはこういう話を聞くといかがでしょうか。

海外動向の変化

樋上 実は全然関係のない分野の話で、僕はクラシック音楽好きでよくコンサートに行くんですが、コンサートホールで写真を撮るのがいいかどうかは、ずうっと問題になっています。で、ここで今井さんが海外の博物館は昔から割と OK だよということを書かれていて、それは僕も経験済みです。一方でクラシック音楽では昔、それこそ僕が 30 年近く

前にヨーロッパに行ったときはどこも撮影不可でした。ほんとに写真でも撮ろうものなら、すぐ係の人が飛んできてカメラを取り上げられるような感じだったのが、今はどんどんアップしてくれと、カーテンコールもどんどん動画でアップしてほしいって方向に変わっている。でも、未だに日本のクラシック音楽の世界では、そんなカーテンコールなんかとんでもない。開演前のホールの写真だけを撮っても係員が怒ってくるところがあるぐらい、ほんとにもうめちゃくちゃ遅れている。

僕らにしてみればこんなのすごい宣伝になるから、どんどん撮ってアップしてくれたほうが、クラシック音楽でいえばアーティストにとってはありがたいですよ。でもホール側がダメっていう問題があって、それとこの博物館の写真撮影の問題ってなんだか非常に似たような感じがすると思っています。

野口 今の樋上さんのお話からすると日本が特殊なんじゃなくて、かつては一緒だったけれども、日本だけ変わらない。

樋上 取り残されている感じがしますね。

野口 なるほど。そういわれてみると確かに著作権の問題や、逆に考古資料はパブリックドメイン¹⁾だって話も海外で昔からあったわけではないですよ。高田さん、これもパブリックドメインの考え方やフェアユース²⁾が普及してきたのは、ここ 2～30 年ぐらいって理解でいいですかね。

高田 そうですね、海外でも FAIR 原則³⁾が出てきている背景には同じ問題があって、それを解決するために考え方を整理しているので、こういう問題は世界共通かなと思っています。

権利制限的な立場でいることの是非

野口 日本が変わらない理由のひとつとして、権利制限的な考え方をみんなが受容してしまうということがあるのかなと思います。例えば著作権法にも冒頭にその著作権の保護と同時に文化の振興に利するためと明確に書いてあるけども、そちら側を誰も重視しない問題があって、先ほどの九博の（撮影禁

止・制限資料が) 映り込んでしまったときにどうするかは、本来設置者側が議論して解決すべきものの、ほとんどの博物館はそれを利用者側に制限を課すことで解決しようとしているのが、日本の特色だと思います。これは私の個人的な受け止めですけど、規範意識の高い方が多くいらっしゃるのかな。博物館がこうだって言っているんだから守るべきだ。展示の撮影は原則や権利とかいう話ではない、また個人の権利ばかりを主張している人たちがいるみたいな受け止めが一定数いらっしゃるのかなという印象を抱いています。このあたり、今井さんは何か思うところはございますか。

今井 ここではちょっと逆説的に書いたところがあって、要するに自分たちが税金を払っている博物館、美術館だから、写真を撮ってもいいじゃないか、という考え方を時々 Twitter でも見ますが、この考え方だと税金を払ってない人は見ちゃいけないのか、外国の観光客はダメなのか、という話にもつながりかねません。納税者だからという理屈でわれわれはもっと博物館の資料を自由に使ったり見ることができるんだ、と主張することは、やっぱり筋が違うかなという気はしています。

なぜ一般の来館者が博物館で写真を撮ってもよいのか、その博物館の収蔵品を自由に見ることを要求できるのかというのは、これはどういう理屈で考えるべきでしょうか。

樋上 逆になんでダメなのかを、たぶん真正面で聞いても誰も答えられないし、まともな答えが返ってこないですね。

野口 まさに今井さんの指摘されるとおり、税金等だからというところある種認められた人だけになってしまって、その延長上に、入館料を払っている人は見る権利、写真を撮る権利があるけれども、SNS に投稿してしまうと入館料を払ってない人も見られる、だからダメだというふうにおっしゃる方もいらっしゃるのですが、これは税金払ってない人はダメと地続きである気はします。そのとき、何が根拠かというところ例えば私の考え方として、日本国内でいうと文化

財保護法において公共の財産であることを謳っているということ。さらに海外の、日本以外から来た人はどうなのかというと、ユネスコ憲章があって、それは世界の市民の共通の財産であることを謳っているので、そもそも自由に利用する権利は自然的に最初からあって特殊事例ごとに制限される場合があるという、そういう順番じゃないかと思っています。

樋上 今の野口さんの論理を逆に博物館側から（僕はそう思っていないですけど）言う、博物館に足を運ばず映像で見てももらっても何の足しにもならない。要は館に足を運んで見てくれというために写真撮影禁止という論理も、逆に成り立ってしまうような気がしますよね。SNS で見るのはけしからん、ちゃんと足を運んで入館料を払う・払わないは別として、入館者としてカウントされて見てほしいという館の論理はもしかしたらあるかもしれない。

野口 そのあたりはどうですかね。他のみなさんは。中村さんはどうですか。

勝手に発信されてはめんどくさいという発想

中村 入館者として来てもらわないと困るから撮影させない、という感覚は私にはあまりなくて、宣伝になるというよりめんどくさいんじゃないかなと思って。館に関わることが勝手に発信されると「館としてそれを把握しなきゃいけない／把握したい」、まあそういう発想ですね。許可する・しないはともかく、そこに気をつかわなきゃいけないという発想はあります。

野口 だから写真撮影は禁止で投稿もしてほしくないということですか。

中村 そうすると自分の仕事は減りますよね。

野口 なるほど。それに対しては例えばここには参加されてないですが、北海道厚沢部町の石井淳平さんは明確に指摘⁴⁾ をしていて、そのような制限を行う場合は制限が課せられる側も平等じゃないといけないので、こっそり黙ってやる、あるいはダメと知っているのにわざとやっている人がいたら、そういう人を取り締まるのは誰なのかが問題であると。

指示を聞いた人だけが制限を受けて、いうことを聞かない人は自由にできる状態を放置しておいてよいのかという指摘もあります。

中村 私だってめんどくさいと思いますよ。だから、嫌だっていうことじゃないですけども。

(補注) 私自身 100 % 面倒と思っているわけではないのですが、自館資料に対する責任というか、把握しておきたいという希望はあります。なお、自身は撮影OKの立場であり、副館長をつとめていた國學院大學栃木学園参考館は撮影・投稿OKです

中尾 私も前職の博物館のときに同じようなお話になったことがありました。中村さんがおっしゃるみたいにやっぱりめんどくさいって意識が大きいということがあって、いわゆるマネジメント層としては、リスクの発生を嫌うのはあると思います。

何かというと SNS 自体を触ったことがない人たち (これはマネジメント層にも多いと思います) が、SNS 自体に不安や恐怖を感じちゃう。情報が SNS で拡散されて無限に広がっていくような状態に対して漠然とした不安を感じていて、それを防ぎたいというのがあると思います。取り締まらなくていいのだから話に関しては、「私たちはダメと言っています。その上で勝手にやる人たちが悪いのであって、私たちが悪いのではない」という論理です。

見かけたら注意はするけど、別に積極的に取り締まるという話にはならない。

野口 そのあたりは石井さんも明確に指摘されていますけども、権利制限をする、特に公務員として、あるいは公務員に準じる存在として権利制限を行うとなると法を執行する立場になるわけですよね。

中尾 裁量権の濫用の話ですよね。

野口 そうです。制限をするのであればきちんと誰に対しても等しく制限をしないと公務員としてはいかんと言うことだと思います。冒頭に誰が受益者なのかという話もしましたが、受益の反対で不利益を被る人は誰なのか、ルールを守っている人だけが不利益を被って、ルールを守らない人が利益を得るという状態を放置していてよいのか。

それから、めんどくさいからと制限をすることによって利益を得るのは仕事が楽になると思っている博物館の人であって、じゃあ博物館の資料や展示というのは、博物館の人のためのものなんですかという問いが逆に返ってくるのかなと思うんですが、このあたりは。

中尾 制限の話でいうと、禁止制限以外にも利用条件をつけて撮影許可する場合だって同じですよ。例えば、撮ってもいいけど出典明示だったり商用禁止であったり。

こういった条件をつけたとして、それが実際に守られているかどうかは、なかなかわからない。制限し、それに関する取り締まりをちゃんとしようとするれば、その監視をどこまでするのかという問題がつかまとうんじゃないですかね。

野口 はい、その部分も込みで考えるべきだと思います。商業利用禁止といっても商業利用する奴がいるから、商業利用以外も全部禁止だという理屈が成り立つのかどうかということですよ。これはいろいろお考えがあると思いますので、ぜひ他のみなさんもおっしゃっていただけたらと思いますけど、いかがでしょうか。

私自身はもう一度繰り返しになりますが、そのやり方だと利益を得るのは博物館の人であって、一般の人は何の利益を得られるのかが全くわからないということを言っておきたい。

いろいろ大変なことがあるから制限します、全部一括で制限しますといったときに、一般の来館者、利用者、一般市民の人がどんな得があるのかということですね。

問題ないものは全部オープンにするほうが楽

高田 制限の話で、さっき中尾さんが言われたように、どこまでいってもそうなんじゃないですか。で、当然取り締まる人がいないと結局黙ってやったもん勝ちになっちゃうので、それは不公平になろうかと思っています。ルールとして破綻し持続可能性もない。もしそのような実態があり機関側も黙認していて問

題ないのであれば、ルールを変えて合法化が良いでしょう。

先ほど野口さんも石井さんの話を紹介されていますけど、われわれ、例えば博物館の経営・運営側に取り締まる権限はないんです。越権行為になるからそこはもう関知しない代わりに、出して問題ないものはどんどん情報公開する。われわれの責任はとにかく、個人情報・差別情報といったものは配慮しないといけませんけど、それ以外は全部オープンにして、あとはそれぞれに委ねるしかないのかなと思います。その先どうしようかは個人の表現の自由や思想信条の自由ですので、各人の自由かなと。

私はそういうことを考えるのがめんどくさいから逆にきちんと公的に出しちゃえと。誰かだけに許されたもの、ではなくて、全員に公開しちゃうことで、めんどくさいことがなくなるのかなと。すでにいっぱい出ているいわゆるトンデモな歴史本を世の中からアレコレするのは難しい。そもそも誰にも「正しさ」を決める権限は誰にもない。そこをどうこうするのは、われわれの仕事の対象外でしょう。もちろん学術的な批判や批評は学術的営みとして必要です。私は逆に制限しないことによってめんどくさいことを避けるのがいいかな、と思っています。

野口 今井さん、九博の中での議論の話には当然、聞いていても出せる話と出せない話もあると思うんですけど、今の議論に関連して九博ではどんな議論されているかで、お話しいただけることがあれば。

今井 九博では2005年の開館からずっと、常設の文化交流展示室の写真撮影解禁については「いつかはやらなきゃね」と言っていたそうです。ただ、やはり最後発の国立博物館なので収蔵品が十分になくて、寄託品や東京国立博物館から借りているものも多いこと、資料を寄託している寺や神社には、「信仰の対象」を自由に撮影させるのはけしからんというところもあることなどがネックで、なかなか実現しませんでした。ところが東博が館蔵品の撮影を解禁したこともあり、2018年ごろから寄託の確認のたびに、原蔵者に「写真を撮らせても大丈夫でしょうか」

と意向を聞くようになって、3年がかりで全部確認をとったそうです。去年の夏にはワーキンググループを作って、撮影NGのものが背景に写り込んだ場合はどうかなど細かい点も半年かけてつめて、ようやく今年の4月から撮影OKになりました。それでも、展示のキモのひとつになっている沖ノ島出土の神宝など、撮影NGのものがいくつかあります（沖ノ島の資料は後に撮影を解禁）。

野口 そうなってくると、いろいろあって大変だから、ダメ／制限するって考え方もあると思うんですけど、もう一歩掘り下げて、じゃあそもそもは撮影OKだと思うのか、それとも原則として博物館の資料は撮影できないのかというところだけ先に確認します。

私は基本原則としては撮影も可、というか公開利用すべきだ、オープン化すべきである。ただし条件がつく場合は制限もやむを得ないと考えています。高田さんはいかがですか。

高田 制限するには合理的な理由と、そのモノに対する権利を持っていないと制限できません。資料の所有権は博物館が持っていますが、所有権を保持していても著作権には及ばない。著作権が消滅すれば、著作物は公有（パブリックドメイン）になり、自由利用が原則です。考古資料に関しては、通常著作権が消滅していますよね。仮に公共的な施設で何らかの理由によって、制限する場合には、合理的な理由が問われるでしょう。

野口 原則可で、なんらかの条件がある場合に制限されるという。

高田 はい、そうです。

野口 次は樋上さん、いかがでしょう。

博物館と美術館の撮影制限に違いはあるか

樋上 今、博物館の話ですよ。では美術館だったらどうなのか。弥生展のときは、これは美術展なので、って言い方もされたんですよ。だからダメっていう。

野口 それは個別条件ですね。美術館・美術展と博

物館は何が違うんでしょうか。

樋上 何が違うのかがよく……美術館の美術展は今でも撮影不可ですかね。というところからして、非常に僕も混乱しているといいますか……僕は原則的にどんどん撮影可にすべきだと思うし、今、寄託資料はダメ、それだけは撮らないでくれっていうのもすごく多いじゃないですか。あれは、寄託者のその分だけ許可を得られていないからダメってことですね。

野口 個別条件ってことですね。

樋上 はい。どうしてもダメと言われれば、それに関しては撮らないですし、それ以外だったらいいんじゃないのっていう意見に私は賛成ですが、さっき言いましたように美術館・美術展はやっぱり今でも不可なのか、という点がやっぱりちょっと引っかかっています。

野口 一通りみなさんコメントいただいた後で……中尾さんが詳しいかもしれないから中尾さんに、博物館と美術館の違いがあるのかないのかを聞いてみましょう。その前に堀木さんにも少し。

堀木 私も基本的に遺物撮影はOKだと思います。現に、報告書で写真も出ていることだし、遺物を展示して見てもらって、しかもみんな真正面から見るわけではなくいろんなところから見ているんで、それをそのまんまのアングルで出してもらうのも、意外な発見があっただけあって楽しいんじゃないって思います。埋蔵文化財の遺物に関しては、もうなんでもござれと。下手をすると発掘作業員さんたちが出てきた端から写真を撮っていますから、そんなところまでは制御できないので、何ともしようがないかなと。オープンであるべきじゃないかなと思っています。

野口 ありがとうございます。次に、中村さんお願いします。

中村 私自身は撮りたいので、OKです。撮ることと投稿することを切り分けている博物館もありますよね。撮ってもいいけど投稿するなど。それでもいいからまず撮らせてくれというところから始めていくべきだと思いますが。先ほど言ったような、館として自館の資料のことを把握しておきたいという気

持ちはよくわかるんです。なので、そういうふうには思い切れない。うちはいいですよ、全然人来てくれませんかから。(一同笑) 学生たちも言っていました。この機に出して宣伝したほうがいいんじゃないですか。私もそう思っています。

まず撮る、これは著作権がある資料、まあそこまでは言いませんけど美術資料であっても、私的に撮る分にはいいですよという段階の博物館はそれなりにあるので。あとはその場で書類を書いてくださいと。それともうかとは思いますが、やらないよりはいいと思っているので。少しずつやっていくことでいずれフリーになることを期待したいと思っています。

野口 ありがとうございます。 続いて三好さん、お願いします。

埋蔵文化財の所有権は市ではなく縄文人

三好 飛騨市の考えは、市長の2021年6月5日のFacebook(フェイスブック)とTwitterを引用します。

「この埋蔵文化財は確かに法的には飛騨市の所有になっているけども、元々は縄文時代の人々が作ったもの。それが土の中に埋まっていて、それを現代人が掘り出して、飾っているわけで、気持ちとしては縄文時代の人々の所有だと思う。仮に「縄文時代の飛騨市民のもの」だと主張することもできなくはないが、それにしても、現代の飛騨市役所が自分のものだから使わせないとかなんとかいうこと自体がおこがましい。縄文時代の人に敬意を払って、むしろ「いい形で使わせてもらってありがとうございます。こんなに良くなりましたよ。」と胸を張って言えるような活用を考えることこそ、我々のすべきことではないか。」

(都竹 淳也 | Facebook)

※現在は都竹淳也「男根を模した縄文時代の祭具「石棒」をめぐる飛騨市の取り組み～文化財のオープンデータ化」

<https://note.com/jg2xxq/n/n554a4412fac1>

つまり、埋蔵文化財の著作者はその時代の人たち、縄文土器なら縄文時代の人であるという旨を、飛騨市長は明言しています。縄文土器自体に飛騨市役所や飛騨みやがわ考古民俗館が飛騨市の所有権を主張することすら、まずおこがましいと。むしろいい形で活用して、胸を張ってこういう形で活用させてもらっています、と言えるべきじゃないかと、飛騨市は考えています。またそうして発信する意義も、うちの市長が翌6日の記事で言っているので引用します。

「文化振興課の学芸員たちは積極的に情報発信をしてくれています。SNS等での情報発信も活発に行われています。

ホームページには、パンフレット類や発掘の報告書などはもちろん、各種講座の資料、現地説明会の資料、そして各山城の再現イラストに至るまで、あらゆる情報が掲載されています。

<http://hida-bunka.jp/>

歴史は消えることはありません。しかし関心を持たなければ、時間と共に埋もれていってしまいます。

専門的な分野ではありますが、特に子どもたちや若い人たちが少しでも関心を持ってくれば、いずれ勉強しよう、研究しようと思う人たちが必ず現れ、歴史を語るようになります。

その時、歴史は地域の財産になります。過去の人たちの営みは、地域の誇りとなり、その時代を生きる人の道標となります。

歴史についての情報発信は、単なるPRではありません。歴史を語る人を育て、地域の未来を作るための大事な活動であると思います。」

(都竹 淳也 | Facebook 2021年6月6日)

つまり、専門的な部分を発信するのは単なるPRだけでなく、それに少しでも引っかけた人が歴史を語る人になり、地域の未来をつくることになる、と明言しています。

私たち飛騨市民のためにというのはありますが、飛騨市役所としては基本的にはそのような原則では

ぼすべての情報は出すと考えています。その意味が僕も実はあんまり分かっていなかったんですけど、堀木さんが書いてくださっていたことや、野口さんも今日おっしゃっていましたが、いろんな方がおられるので、選択権を持って、こちらが出す情報にアクセスしてもらう考え方になり、今の写真撮影でいくと撮影者自体にもきっちり責任を負ってもらうって考え方なのかなと認識しています。

野口 ありがとうございます。では中尾さん。よろしくをお願いします。

禁止するより利得を示す

中尾 写真撮影に関しては、やっぱり基本的には権利のあるなしが大事になってきて、私は考古学の博物館の出身ですから、これを著作権として主張することもできないし、所有権や管理権とするのも厳しいだろうということで、弥生文化博物館は基本的に写真OKだったんですね。常設展もOKでしたし、特別展の方も、借りるときに必ずお願いをして写真撮影OKにさせてくださいという話をいたしました。ただやっぱり所有者の方によってはダメです。よって話があったり、極端な例では、自治体の条例の中に所蔵資料の写真撮影禁止を謳っているところもあったりしたんです。なので、その博物館のものを借りてくる場合にも条例があるので写真撮影は許可できないと言われるところもありました。

これに関しては、所蔵元の自治体がそう決めているのであれば仕方がないと、その資料だけは撮影禁止という扱いにしていました。なので、やはりこの問題については、こういった権利というか根拠・制度があって禁止するのかという部分かなと思っています。個人的には、問題のない資料については、どんどん撮影してもらって使ってもらったほうがよい。

博物館側がそういう方向に向かっていかないのは、これは次の話になるかもしれませんが、「その権利がないので禁止するのはダメですよ」というよりも、来館者に写真を撮ってもらって使ってもらった場合、こんなメリットがありますよってアプロー

チでないと、博物館も写真撮影可能にしようって方向に向かないような気がします。さっきの言い方ですと、何のために写真撮影 OK にするんだと。やったってリスクが増すだけじゃないというふうに言われてしまうと、そこで止まっちゃいます。

写真を撮ってもらって一般の方が SNS でアップする。それが宣伝効果を生んだり、考古学にもっと親しみを持ってもらったり、そこで盛り上がって興味を持つ人が増えたり、メリットはあると思うんです。SNS を使わない人はこのメリットを理解できないですね。

単に炎上のリスクが増える、不適切な利用が増える。そういった不安や懸念だけを挙げていくととりあえず禁止っていう方向に行っちゃうので、まずは得があるんだと示すこと、メリットを理解してもらうことかなって思っています。

今、それこそ小中学校に一人一台タブレットが配置されていますし、それがなくてもスマホをみんな持つ時代になっていますから、みんなが撮影者や表現者になって発信者になれる時代。このときに博物館がその可能性を閉ざしてしまうと、市民参画も新しい創造も生まれませんし、運営面からいっても、利用者が勝手にプロモーションやマーケティングをしてくれるような機会をどんどん逸してしまっている。ここの部分損ですよ。やってもらえば得なんです。

そういう方向で言わないとなかなか現場のほうとしては進んでいかないと思います。

さっきの美術館と博物館の違いみたいな話を少しだけすると、美術館の人ってやっぱり著作権が残っているものを扱うことも多いんですよ。いわゆる近代美術ですと、作家が亡くなって70年過ぎてないこともありますし、ご遺族の意向を尊重しなければいけない場合も多かったりするので、基本的にこのあたりに関して美術館の人はものすごく慎重に考えてらっしゃることが多い。現代アートでもそうですよね。

そういう中で著作権が存在しない古美術を展示する際であっても、「うちは写真禁止」っていうのはタガとしてはまってしまっていて、美術展・美術館は写真

禁止っていうようなことが多いのかなと思いますね。著作権のことを真摯に考えてやっているかどうかよりも、どちらかというと慣行、ルールになっちゃっているのが現状なのかなと思います。以上です。

野口 ありがとうございます。つまり中尾さんのお考えとしては、美術館だから博物館だからではなくて、著作権があるから・ないからが本来のはずだということですよ。

中尾 そうですね。

野口 おそらくそのあたりが一般利用者の人が一番理解できなくて、Twitter でもコメントがつくのは、だったら著作権がない資料は撮影可能なんじゃないですかっていうとまた、博物館側が個別条件を提示して……というパターンがあって、そこはたぶん中尾さんが言ったルールになってしまっているという部分ですね。

そこで今だいぶ耳が痛く聞いていたんですけども、現場は現場で今までの流れがあるから野口みたいに理念・原則はどうなんですかといきなり詰め寄られても、そうではなくてちゃんと現場から変えられるようにしていこうという提言として受け止めてよかったでしょうか。

中尾 そうですね。現場でしっかり考えるということ。樋上さんの今回の報告でもありましたけども、Twitter での発信によってすごく「YAYOI・モダンデザイン」って企画展が盛り上がったってことですよ。グッドプラクティスとして誇っていい部分だと思うんですが、展示に使用された挿図や図面にしたって、Facebook などでも研究者向けに発信をしたから、意見をもらえて事前に修正できたってお話もあったと思います。SNS の発信によって研究も進んだってことですよ。

やっぱりああいうメリットがある、得がある、やったほうがいいって話を進めていくほうが、あなたに禁ずる権利はないですよって言い方をされるよりはかはわかりやすいのかなと思います。

野口 これはあくまで個人的な見解で、担当者が理解するかどうかは法や制度よりはずっと下の問題だ

など私は思いますけれども、ただまあ事を荒立てることが目的でもないの、そのあたりをどうアプローチするかについては、いろいろと作戦を練ってということなのかなと思います。一方どういう得があるかという点についても、なかなか博物館や文化財の中の人だけで議論をしているといつまでも届かない。そのときにもうひとつよく Twitter で聞こえるのは、利用者の側から何か言ってもいいんですか、という質問があります。

何が何でも撮らせろという話ではなくて、例えば私たちが宣伝に協力できますと。さっきの中尾さんの話だと中尾山古墳も専門的な知識を得ただけじゃなくて、早くにリツイートしたりして、自分がその情報を早く知っているってことを見せたい人もいるみたいな。写真の投稿もおそらく同じですよ。学術的な価値や写真を所有したい欲よりも、こんなの見てきた、まだみんな見てないでしょう、みたいな人も結構いるかもしれない。そういう投稿がさらに、じゃあ自分も見に行ったら投稿したい、という気持ちにさせることが示されると、たぶんそれが中尾さんのいう博物館側の利得になりますよ。写真撮影可にするとどんどん人が来るっていう。こういう言い方もひとつあるかもしれない。

でもそれは博物館の中の人からはなかなかわからないので、一般の人がどのくらい言うべきなのか。言ったときに耳を傾けてもらえるのか、このあたりはどうですかね。中尾さん。

美術館のデジタルマーケティング

中尾 森美術館は、ビル看板や駅看板に多額の費用をかけるよりは SNS の発信で効果を上げようとデジタルマーケティングの一環として SNS にかなり力を入れてやっています。塩田千春っていう現代アート作家のすごく美しい、糸を張りめぐらすような展示をやったときに、Instagram（インスタグラム）でものすごくきれいな写真と一緒に紹介しましたら、見た方々が、そういう写真を撮りたいって言って、たくさん美術館に押し掛けました。森

美術館の塩田千春展は SNS によるデジタルマーケティングのグッドプラクティスのひとつとして非常に有名ですけど、美術館でも戦略的にそういうことができるんですよね。

さっき言ったように美術館の人ってなかなか著作権の意識で難しかったりしますが、そういうメリットがあるのをちゃんと検討して積み上げていっているところもある。事例があまり知られていなかったりするのかなとは思ったりしますね。もったいないと思います。

野口 そうですよ。美術館じゃなくて考古ですけど、東北の縄文時代遺跡（史跡）の博物館学芸員の方に聞いた話では、YouTube（ユーチューブ）に遺跡の四季、春夏秋冬の風景を流したら、台湾からこれを自分の Instagram にあげたいから来ましたって人がいたみたいな話があって。

これはすごいですよね。YouTube にあげるだけでインバウンドを呼び込める。でも、こうした効用や利得はたぶん伝わっていない感があるのかなと。

中尾 嫌な言い方ですけど、セルフイーを撮るだけの利用者をちょっと馬鹿にするというか、そういうのは博物館の楽しみ方じゃないっていうふうに、切り捨ててしまうような人もいらっしゃる。いろんな楽しみ方があってよいと思うんですけど、やっぱり作品を見てほしい、知識を持って帰ってほしいというのが強すぎて、美術館の素敵な空間で写真を撮ったり、作品と一緒に自分を撮りたいというような楽しみ方を無視したり否定したりしてしまうところがある。観光地と思われたくない、みたいな意識も強いのかなと思ったりしますね。

樋上 それって来てほしくないって言ってるのと一緒にですよ。（一同笑）

中尾 自分の望むお客さんに来てほしいのかもしれませんがね。望まないお客さんには来てほしくない。記念撮影して何が悪いと思うんです。あなただって東京タワーで写真撮るでしょうって。

見せたいものだけを見てほしいという考え方

樋上 実は、今日「すごい博物館つまらない」っていう Twitter ご覧になりましたか。

ちょっと共有してもいいですか。



<https://twitter.com/mercurius88/status/1400800697159806981>

野口 これ、博物館の人、みなさん反応されていましたよね。

樋上 そうなんです。博物館、博物館周辺の人が反応しているだけなんですけど、ここまで露骨に書かれてしまうとなかなか辛いものがありますね。

で、次の話にいっちゃうんですけども、実は愛知埋文センターのツイートも同じじゃないかと感じて、これを取り上げてみたいなど。その話はまた後にしましょうか。

野口 いえ、では話をつなげたいと思いますが、その前に自分たちの見せたいものだけを見てほしいという考え方に対して、たぶん三好さんはものすごく言いたいことがあると思いますので、そういう考えの博物館の人たちに対して飛騨市からの魂の叫びをちょっと一言で。一言じゃなくてもいいですけど。(一同笑)

三好 ありがとうございます。そうですね。僕も、ほんとに数年前まであまりそういうことが分かってなかったです。発表したことと被りますけども、まずいろんな楽しみ方をされる方がいらっしゃる事が前提ですよ。それがあって、じゃあその人たち

のために、あらゆる切り口のものを用意しとこうっていうのが、飛騨市であり今僕がやろうとしている考え方です。

まだ、もちろん全部はできてないですけども、これまでずっと少数ながら来てくださっていた研究者の方々に、逆に今は届きにくくなっていないかっていうのが、今の課題です。

野口 研究者に届きにくくなるというのは、具体的に。

三好 コロナの話もあるかもしれないですけど、資料見学で年に3、4件は申請があって、報告書の何番ってきっちり出して、写真撮って帰っていただいて、図面なりも撮って帰っていただいて、それを論文等で活用していただくということを、まず始めたのが平成29年ぐらいです。けれども、昨年度はほぼそういう形での活用はなくて、なぜ減ってしまったのだろうと。

三好が文化財を使ってふざけてるんじゃないかっていうイメージで見られてしまっているのかな、という心配を僕はしています。

野口 なるほど。どうですかね。実際に調べてみると単にコロナ禍で行きづらくなっているだけだと思うんですけども。

中村 私もそう思いますけど。

三好 それならよかったです。(一同笑)

野口 三好さん、予想通りありがとうございます。次の樋上さんの Twitter での提言を受けて、そっちに話を持っていこうと思った内容のとおり、三好さんが言ってくれました。利用者側が選べるようにメニューをたくさん用意しておくことが、もうひとつオープン化の要点かなと。

全部まるごとオープンというのは理想といえば理想だけど、なかなか難しいので、できるだけ幅広く用意しておく。報告書あるいは一般向けの書籍にまとめたものだけでなく、自分で撮る写真もあるし、人が撮った写真もあるし、図面もあるし、最近だと3Dもあるし、という中から使いたい人が使いたいものを選ぶということなのかなと。すでにい

くつか公開されている博物館のオンライン動画を見た、現役の大学生の率直なコメントをいただいたのですが、かなり衝撃的な内容でした。

彼らが言うには、素材はすごい。例えば自分が見たことがないもので、資料のすごさはわかる。ただ、例えばナレーションが博物館の解説パネルを棒読みしているだけみたいで、ちっとも頭に入ってこないし、没入感のなさも、YouTube世代なので、きれいな画とナレーションだけだと、NHK、Eテレみたいなイメージになっちゃってもう、途中で見るのをやめちゃう。

こんなにいい素材があるなら、作り方を変えたらもっと人が集まる動画が作れるのにとっていて、まさにそれがいろんなメニューを用意するということなのかなと。

要は博物館側がこれだと思って作りこんだものが外れている。むしろ撮影OKになったら、YouTube職人みたいな人がもっとみんなが見てくれる動画を撮ってくれるんじゃないですか、みたいな感じです。そういう意味でも、基礎データのオープン化と一般普及はやっぱり地続きだったと、もう一度思い出した次第です。

では、樋上さんのTwitterの話から三好さんを経由して、次のテーマに移っていききたいと思います。
高田 ちょっといいですか。今日飛騨市さんのFacebookで、今後コメントも返していきますってお話があったと思うんですけど、それをぜひ補足説明してもらいたいです。

発信側・企画側にもなれる人を増やしたい

三好 分かりました。見ていただいてありがとうございます。今日に間に合うようにというわけでもなかったんですが、うちの若い職員が中心になってくれて、今日からFacebook等のコメントに返信することとなり、またTwitterもやっと開設できました。発案は4月から来られた新課長です。

完全に愛知県埋文さんのいいところをリスペクトしましたけれども。このコメントをすることの目指

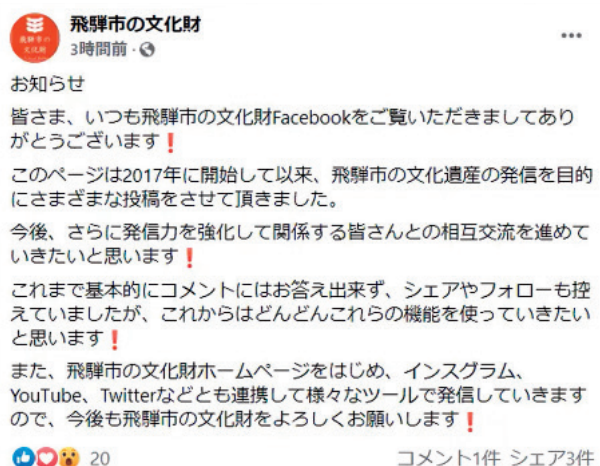
すところとして、先ほど中尾さんのご発言でもありましたように、やっぱり石棒クラブをやって、誰もが今度発信側になるというか企画側にもなれる。それを飛騨市の関係人口の定義では行動人口と位置付けていて、そういう人を最終的には増やしたいという思いがあります。そのような思いの中で、もう一歩先に進みたい。双方向性というよりも、もう一歩先を見据えて、この返信をしていくということを今日から始めました。

野口 これは当然、公式のアカウントなので、課長部長またはそれ以上に許可をとって、今後はそのコメントについても、例えば決裁をとってから返信をするんですか。それともいわゆるシャープさんのアカウント⁵⁾みたいに当局即妙に返信しても大丈夫って運用ですか。

三好 はい。一応内部で、口頭で決裁をとるなり、画面を見せながら二人以上OKなら、その場で返信しようって理解でやろうと思っています。一人の意見では返信しないという考え方です。

野口 ただしその上、その上とハンコと一緒に手繰っていくようなことまではしなくてよいということですね。素晴らしいです。高田さん、自治体公式アカウントとしては異例の運用ですね。

高田 いや、すごい。すごいです。最初の樋上さんの紹介されたTwitterで面白くないっていうのは僕も思っています。面白くないんですよ、金太郎あめみ



<https://www.facebook.com/hidanobunka>

たいで。僕は奈文研の SNS を管理していますが、正直自分のチームで運用しておきながら、おもんないと思っています。一番優先すべきことは炎上しないこと。これが最優先。実際に困ることは、SNS に書き込まれたご意見の取り扱いですね。爆破予告などのようなものは事件の扱いになりますが、そうではないような書き込みについては、いろんな意見がありますので、寛容にするのが良いと思います。ただ、やはり世代なのか人ごとなのかはわかりませんが、インターネットに対する考え方の違いは良く感じます。SNS などに不慣れな人が、SNS について若い世代からは悪手と思われるような意見を述べるのは、なかなかしんどい状況かなと思います。本人は自覚できない。

そういう中で、飛騨市さんの取り組みはすごいと思いました。あとは、微妙な書き込みをするとどうなるのか、どうするのかっていうのも思ったので、ちょっと要モニタリングです。

野口 匿名で意図的にやらないように。(一同笑) 今井さん、いかがですか。この飛騨市さんのこの取り組み、Twitter でも同じような文面がもうすでに出ています。

今井 実は知らなかったんですけど、面白いなと思います。ただ、たぶん見た人も、普通の行政や博物館のアカウントって部署や施設など組織名になっているので、何が他と違うのかっていうことは、かなり評判になってこないとわからないかもしれないですよ。そのへん、もうちょっとアイコンなりに工夫があってもよかったかなって気もします。もしくは、職員が自分の名前で書きちゃうことを許可する方向にいなかったのかなあとは思いますがね。二人以上でっていうのもわかるんですけど。

朝日新聞は、実は私が SNS を始めたきっかけもそうでしたが、会社としてのガイドラインは示した上で、記者のアカウントを積極的に公認していききました。新聞記者だから馬鹿なことは書かないだろう、という信頼をしてもらったことでしたが、実際にやってみると、炎上を起こしてアカウントを凍結さ

れたり、公認マークを外されたりしちゃう人もいました。もうだいたい他社も追いついてきましたけども、Twitter に関しては、うちはすごく新聞社の中では SNS 利用について先をいっていたと思いますね。だから、役所のアカウントも個人名で公認マークをつけてやってもいいんじゃないかと私は思うんですけど、いかがでしょうか。

自治体アカウントを個人名で発信すること

中尾 弥生文化博物館の Facebook は個人名をつけています。必ず記事の最後に括弧付きで名前を入れるんですね。

これは何のためかっていうと、やっぱり個人の自由っていうか、ある程度個人の責任で発信しますって形をとりたかったのと、個人の業績にもしたかった。期限付きの学芸員もいますから、こういう形で出すことで、次のステップに進むときにこんな仕事をしていましたというふうに見てもらえたらと。

でも、やっぱり書いてもらうのって難しいです。例えばこの記事、単なる広報にすぎない内容になっていて、面白いものではないですよ。もちろんこういうのも必要ですけど、読んだ人に響かない。書くときにどうしても上のチェックが入るので、若い人は上の顔色見ちゃいますよね。注意されないように無難な記事を書こうとするので、こうなっちゃう。

コメントでも、ほんとに面白いのを返したほうがいいに決まっているので、飛騨市さんが、安心してふざけたコメントを返せるかどうかは、人間関係に負う部分が大きいかなと思います。

私は弥生博のときは、ある部分では好きにさせてもらっているところもあったので、「ファラ尾」とかふざけた発信をしていましたよね。野口さん、覚えてます？

野口 銅鐸兄さんも出ていましたよね。

中尾 最初は「そんなアップするの？」って顔もされましたけど、思い切ってやれる立場だったからやれたんです。でも、やっぱり若い子はそこまで思い切ってやりづらいので、ある意味ふざけた発信が

今日は展示室の外、エジプト展に来た記念になる写真撮影のスポットを紹介していくで～。

まずはこちら。

本展期間中だけの特別企画、「エジプト衣装体験とミイラ棺に入る」や！

古代エジプト人が好んだ純白の服のほか、黄金の襟飾りを着ることができるとやでえ。

ほかに、ファラオがかぶるネメス頭巾、オシリス神がかぶっとるアテフ冠、ハトホルのかつら、編み込みがかっこいい女性のかつらなど、いろいろ遊び放題や。

これは体験するしかないやろ！

あ、ミイラ棺に入るときは、クツを脱いでや？

あと、衣装は丁寧に扱うこと。

ファラオとの約束やで？

#エジプトin弥生博



<https://www.facebook.com/YayoiMuseum>



<https://www.facebook.com/YayoiMuseum>

なかなかしづらいのがあって。ほんとこのあたりは、難しいなと思いますね。面白いものが書けないのは、いろんな事情があるってことですね。

野口 私も実は弥生博のことで中尾さんのお話を振ろうと思っていたので、まさに今解説していただいたとおりですね、これが公式でファラオや銅鐸兄さんを出している記事で、これ中尾さん本人が書いてるんで

すよね。銅鐸兄さんの弥生時代講座って書いてあるけど、本人が書いてる。(一同笑) これを個人のアカウントじゃなくて、公式でちゃんと書いてますよと。

でも、これは副館長でも誰でもあかんって言われても、いいでしょうって言いきれの中尾さんだからできたみたいなの。

中尾 銅鐸兄さんはまだね、学術っぽいからいいんです。ファラオのときは、かなりドキドキしながらやりました。(一同笑) あれが認められたのはほんとに懐が深いなと感謝しています。でも、やっぱりあのような路線は跡を継いでくれている人がいない。

野口 これはそうですね。ドキュメントの方にも飛騨市の取り組みで、私ちょっと意地悪して三好さんの後どうなりますかって書きまして、まだ属人的であるという課題がありそうですね。ただ、飛騨市はこれからなので、ぜひ。SNSの運用実績が長いのは愛知なので、そのあたりもう一度、堀木さん、樋上さん、今の流れを受けて何かあれば。

堀木 うちの方のFacebookのコメントは、内容によりけりですね。寄せられた内容が、例えば電話がかかってきて、「こんななんだけど教えてくんなーい」という軽いレベルのものであれば、その記事を書いた人なり、その時代を専門とする人が、電話を受けたと想定し、コメントを書いています。また、その書き込みのためのアカウントやパスワードは、Twitterは職員みんなで共有しています。Facebookの方もこの間、共有したけどなかなか書いてくれなくて、ちょっと困ってます。

宣伝より専門性や個性を出していくべき

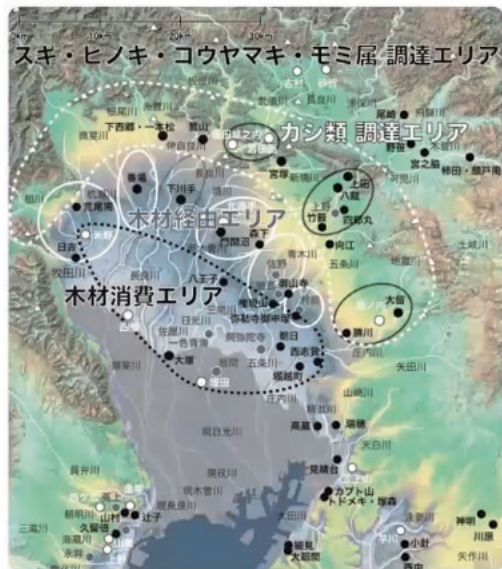
樋上 Twitterでいえば、今、画面でうちのホームページで最近の投稿を出しています。

見てもらったらわかるとおり、かなり当たり外れがあるんですよね。すごく多かったら100以上“いいね”がつくのもあれば、もう二ケタでおさまっちゃうのもあって。その中で、最近で言えば私が書いた投稿が一番当たったのかな。ほんとにもろ自分の研究をバーンと出したんですけども、結構いっぱいコ



愛知県埋蔵文化財センター @aichi_maibun · 2021/03/30

濃尾平野低地部では燃料材や建築材以外の木材は周辺の山間部に依存し、山間部の人達が木を伐り出し、主要河川毎に中間地域の集落を経由して運んだと考えられます。弥生時代の初期から集落間の分業が認められるのが濃尾平野の特徴です。



1 139 340

https://twitter.com/aichi_maibun/status/137673384844522912

メントがつきましてですね。それに対して自分のアカウントでも答えて、その投稿に対する返答がまたきたりして。僕の場合は公式と自分のアカウントと、なんとなく両方勝手に使っちゃっていても、一応お叱りはないので、遊んでもいいのかなという感じでやっています。

うちのホームページも Twitter も、つまらん投稿はほんとにつまらんですけれども。その人がちょっと自分の研究や個性を強く出したものがやっぱり、明らかにウケてる傾向がありますよね。反応が確実に返ってくるのを見ると、若かろうが年寄りであろうがどんどん個性を出していくべきだと思っています。

こういう場で言っちゃなんですけど、よそ様を見ると、催し物の宣伝しかしてないですよ。なおかつ、日々じゃなくて飛び飛びですし、ほんとに自分のところをちゃんと宣伝したいのか疑問に感じます。すみません、すごいええ加減な話で。

野口 いえいえ。よその話をしたときの高田さんの苦笑っぷりがすごかったですね。

高田 いろいろ内部の立場が…。(一同笑)

野口 今の、その樋上さんの研究的なものだったから、340“いいね”と150リツイートなんていうのも、たぶん冒頭の今井さんの一般の人でも現説資料を知りたい、プレスリリースだけでも知りたいというのは、そのときに研究として知りたいんじゃないくて、中尾さんもおっしゃっていたみたいに、普段触れられない研究者や研究成果みたいなものが SNS に流れてくるだけでうれしい人もやっぱりいらっしゃるってことですかね。

樋上 うん、そうですね。で、そんなの知らなかったって反応が多いんですよ。濃尾平野って全然木がとれないんだ、だから弥生時代にこんな流通が発達したんだって、すごい新鮮に感動してくださるとやっぱり、こっちもそれに対して何かお答えしたくなりますよね。反応があるとやってる甲斐があるという気がします。

野口 どうしようもないコメントもつくと思うんですけど、本やウェブサイトは、話しかけても返事が返ってこないからつまらないというのはすごくあると思うんですね。特に YouTube や SNS に慣れた世代としては、この愛知埋文の Twitter カウントに質問したら、愛知埋文は返事してくれなくても樋上さんという、本屋さんに行ったら著書も並んでいるような人が返事をしてくれると、たぶんそれだけで返事をもらった人はかなり喜ぶし、もしかしたらそれをきっかけにちょっと弥生時代について調べてみようと思うかもしれないし。

樋上 僕の本買ってくれるとかね。(一同笑)

野口ほんと、「得がある」ですね。中村さんは一番学生に近いところにいらっしゃるんで、学生と話をしていたりすると、今の Twitter の流れからすると学生の受け止めはどんな感じですかね。

他館のオープン化を盛り上げる発信もアリ

中村 ちょっとこの話と離れますが、私、短大の入試広報も担当していて、短大の Twitter をやっているんですけども、高田さんがおっしゃったのと同じような問題があるわけですね。

上司が確認をして発信するのではなくて、担当者の判断で発信できるんですけれども、まあその分、学生の顔を出さないなど自粛してつまんなくなっている。一方で外圧があって、リクルートさんに今年積極的な担当者が入ってくれて「とにかく学生を出しなさい、リアルなところを出しなさい」、「こちらである程度作りこんだものをつくるよりは、高校生に近い学生がどういうものの写真を・動画を撮りたいのか、それにまかせてそれに根差していくべきだ」、と言ってくれていて、できるだけそれに沿うように動こうと思っています。

先ほどの話に戻りますと、博物館にお客さんが来て、お客さんが何を撮って出していくということだと、われわれがやるとしたら、やっぱりわれわれ専門家が見て何が面白いのか、東博の縄文展のときには勝手に解説する人や専門家がいましたよね（私も少しやりました）。われわれができることとしたらああいうこと。

他の博物館に行っても、われわれの視点から見ればこれがこういうふう面白い。できればそれは自分のところでやるべきだと思いますけれども、自分のところで自由にできないのであれば、自由に撮らせてもらえるところへ行ってみて発信していく、というのは私もなるべくしているつもりです。私は文章が長いので、かなり想いが高まらないと書きませんが、そういうところにつながってくるかなというふうに感じております。

野口 ありがとうございます。TwitterでもFacebookでも展示を見に行ったプロの人が写真と一緒に解説書いていると、結構“いいね”がついたり、見に行きたいですって反応がついたりするので、それも中尾さんが言った博物館にオープン化による利得を示せるかどうかは、例えば一般の人がTwitterに投稿すると来館者が増えますよ、には、そんなことないだろうと思われちゃうかもしれないけど、こういうプロの人が解説をつけて勝手に宣伝してくれますっていうほうが、もしかしたら博物館側にとって敷居が低いかもしれませんね。ちょっと差

別的になってしまうかもしれませんが見ず知らずのただ縄文が好きってだけの人よりは國柄の中村先生がこの展示はいいです、見に行きましょうっていうほうがお得感はあるかもしれないですね。

それはもしかしたらわれわれも積極的にオープンにしろしろと言うんじゃなく、オープンになっているところを盛り上げていくのをやりましょう、やるべきだ、という感じですね、中村さん。

中村 そうですね。それは専門家が、という場合もあるでしょうし、そういうのが好きなお友達があちこち行っているから見る場合もあるでしょうし、それぞれがやったことが、どういうところに共感を得られるかは、またそれぞれだと思いますね。

想定しないユーザーへの情報の届け方

中尾 高田さんが紹介している江上さんの論文(<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/article/11958>)の中で、コトラのラテラルマーケティングを紹介していて。コトラは有名なマーケティングの研究者ですけど、水平的マーケティングって言って、結局顧客がどういうふうに広がっていくかって話ですよ。

例えば「歴史好きな人は博物館に来る」というような考え方があったときに、逆転させて、「博物館に来ないけど歴史が好きな人」、「博物館に来なくてさらに歴史すら好きじゃない人」、も顧客として存在しているとなるわけですよ。

インターネットで情報発信するのは、来館者以外の人にも情報発信するってみんな当たり前みたいに理解していますが、自分たちが今まで相手にしなかった顧客層に情報を発信しているって意識を自覚的に持たれてないんじゃないかと思うときがあります。ファンである来館者に向けて伝える情報と、今まで来館してない人に対して発信する情報は、内容も伝え方も当然違って然るべきですけど、あまりそういうことを意識せずにやっている。だからFacebookの内容もチラシに書くようないわゆる広報的なお話だけになってしまっていて。いろんな人に向けて自分が情報を発信していると思えば、そ

の情報の内容も変わってくると思うんですね。なので、SNSの内容がさっき面白くないって言われてしまったのは、その人が博物館をたぶんあんまり利用されてないか、あまり歴史や美術が好きじゃないか、どうかまでは知りませんが、ファン以外の方にも刺さるような価値や魅力を発信できていないからかもしれません。

当然のことですけど、これまでの来館者以外にも利用者が広がっていくということは、自分たちが今まで相手にしてなかった、価値を届けられていなかった想定外の人たちにも発信する情報が広がっていくんだってこと。そうした人たちを切り捨ててしまふんじゃなくて、想定外の人にも届くような情報の出し方や発信内容はなんだろうって考えることはすごく大事だと思うんですね。

オープン化にかすっているのか、いないのかわかりませんが、SNSの発信の仕方という、そのあたりの意識が大事なのかなと思います。

野口 ありがとうございます。これ、難しいですよ。想定外のユーザーを想定するのがそもそも難しく。想定してなかったのに届いてしまったのが、たぶん樋上さんと三好さんの今年の体感だと思うんですけど、その観点でもう一度、樋上さんから。Twitter、ニコニコ生放送・ニコニコ美術館⁶⁾はその流れですよ。

樋上 そうですね。あれは予想外でしたよね。ただ、ニコ美は計算してました。(一同笑) 橋本麻里さんを対談で呼ぶ時点から、この人にウケたら、そういうところで取り上げてくれるだろうなって完全に計算していて、ほんとに計算通りうまくはまってくれたので、こっちとしてはしてやったりだったんですけどね。

松木さんも橋本さんも、私がこの人を呼んでくれて希望したので、明らかにそういう意図がありました。ただNHKに出たのはちょっと想定外で、ほんとは日曜美術館に出たかった。そっちから声がかからなくて、ちょっと残念だったのはあるんですけど。(一同笑)

また全然話がかわっちゃうんですけど、今の想定

外の人にどうやって目に触れるかって話、僕の趣味のクラシック音楽でもよくあることです。ふと発信したらそれがめちゃくちゃウケてぶわあーっと広がることはあるし、専門家か専門家じゃないかというのもあって、いわゆる音楽評論家の人の感想よりも、一般のすごく詳しい人が書く感想のほうが、ちゃんと身銭切って書いていますから、すごいきっちりとしたものが出てきて、じゃあそれ聴かなあかんって広がり方は実は普通にあるんですね。

そういったものはTwitterに日常的に接しているとわかることで、この業界でも利用しない手はないと思っています。博物館だけじゃなくて、本の紹介もそうですね。この考古学の本読んだけど、すごい面白いよっていうと、普段それほど興味なさそうな人が買って読んでくれるってこともありますから。周りの人が何に興味持っているのかは、実はわかっているようで、わかってないんで。そういうのはどんどん積極的に利用すべきだなというのは日々感じていることですね。

野口 ではもう御一方、三好さん。やってみたら想定外のところに届いて、思わぬ成果が出た話でどうでしょう。

コロナ禍での活動が評価

三好 ふたつあって、ひとつは文化財×〇〇を意識した取り組みをしようと、3年前からやり始めていました。それで普段、石棒に興味がなくても、例えば、石棒×精神科医、石棒×テクノロジーで3D、みたいな取り組みを始めて、石棒以外から入ってきてくださる方がいるのは想定していたところです。で、少なからずそういう人に引っかかっていったっていう。

想定してなかったのは、コロナになったことです。そもそも飛騨みやがわ考古民俗館が年間30日しか開いてないので、残りの330日、いかに館の資料を活用するかと考えたのがデジタルやオンラインでした。コロナになって東京の人も東京の博物館に行けないというようになったときに、ずっと開いて

ない前提で活動していた当館が、みなさんの目に留まりました。中尾さんには飛騨みやがわ考古民俗館なんて誰も聞いたことない博物館が急に有名になった、って言うてもらったんです。そういう評価になったという、コロナがほんとに逆の意味で僕たちには働いたのが想定外でした。

野口 ありがとうございます。ほんとにそうですね。まあ協会のときに報告していただいた成果が、早速1年目で出たわけですね。来館者数とふるさと納税で。ふるさと納税のあの金額は、見た人、聞いた人、相当衝撃だったみたいです。

堀木 うん、うん。

連携投稿によるSNS戦略

野口 基礎自治体の人たちにとってみると、文化財であんなに稼ぐってたぶんありえない話だと思うんですね。今SNSの話が続いていたので、もうひとつ私が気になっている取り組みがあって、山梨県の博物館さんが、連携して相乗効果で投稿しあうことを、去年からすごくやってるんです。



https://twitter.com/hokutoshi_kouko/status/1370633960078733312

縄文すごろくのときも、日本遺産絡みのイベントのときもやったし、今山梨県の釈迦堂博物館で『水煙(みずけむり)』って展示をやっていて、展示撮影・投稿OKなので一般の人でもバンバン投稿しています。

例えばこれ、南アルプス市が釈迦堂のみずけむりに、うちからこういう資料が行ってます、と投稿して、釈迦堂も当然投稿していますし、他には北杜市の資料館も投稿していたり。これをイベントのたびにやっています。実際にイベント自体も協力して、現地でも協力して、SNSでもこうやってバンバンとやってくと、ハッシュタグでも数が増えるし。今は画像だけ示していますが、お互いにリツイートしあっているんで、インプレッション数が上がることで、他の人のタイムラインにも上がりやすくなるという、ある意味SNS戦略の基本をしっかりとやっている。自己リツイートは、コメントを付けた引用リツイートにしないとインプレッションがあがらないからタイムラインに上がってこないんですけど、他のアカウントがリツイートする場合はどんどん上がってくるといいうのもポイントを押さえていて。誰が仕込んだんでしょうね、山梨の人。誰かいるんでしょうね。

これもたぶん、今後のひとつの展開なのかなと思ったりしてですね。そうすると今、ずっと見てますけど、一般の人でもどんどん上がっていて、中村さんなんかは確実にフォローしている縄文のファンの人たちにも結構効いてますよね。

これはまさに利得。自分たちも主体的にやっているし、一般の人も来る。山梨県さんはSNSの効用・利得を理解している。

釈迦堂博物館は全部写真OKですし、ダメ元で動画いいですかって聞いたら、動画もいいですって言われたって投稿があったので、すごい。よくよく考えれば、静止画がOKで動画がなんでダメなんだろうって言われちゃうとそのとおりですけど。リニューアルしてきれいになったのが、ものすごく生かされていて。何がよくて何がダメということを博物館側であまり制限していない。樋上さんの、研究成果の途中も公開するという取り組みは、一般の人

には難しいだろうから、このくらいでいいだろうってことではなく出しているわけですよね。その後樋上さんでは、線引きをしたりしなかったりってありますか。

一般向けでもレベルを下げない

樋上 今、一般の人ってほんとに最先端の研究を求めていますよね。いわゆる教科書的なことなんて誰も求めてないじゃないですか。

だから、僕がこれまで関わったもので、例えば年輪酸素同位体比のプロジェクト、ああいうのはすごい食いついてきますよね。だから、こんなんわかってへんやろうって言うのじゃなくて、やっぱり、どうやってそれをわかってもらうような文章や、図を出すかを考えるべきであって、そりゃもう僕らが講演会なり、講座なりでしゃべるときでも全く一緒に、一般向けだからレベルを下げるんじゃなく、むしろ今一番新しいことをどうやってわかりやすく出すか考えるべきなんじゃないのかなって、いつも思っています。

野口 そのあたり、三好さんは飛騨市の文化財の投稿では、基準じゃないけど一般向けなのでこのくらい、というような運用をしていたりするんですか。

三好 各人がSNSをあげるときは決裁なしであげるんで、全く各人次第って形です。あまりそういうことは僕たちでは意識できてないので、それは早速明日から真似したいと思いました。

中尾 コメントはチェックされるのに、投稿はチェックされないの？

三好 投稿はチェックないです。(一同笑) コメントもやり始めてからそうになっていくかもしれないですけど、初めはやっぱり、想定として厳しい質問があったときに担当だけで答えていいのかとか。事前にすべての危機を想定できないので、考えながらやるかっていうふうになっているんですよね。

野口 なるほど。今、衝撃の事実でしたよね。

コメントが二人チェックなら、投稿もチェックだろうと思っていたら……。

三好 現場から帰ってきて投稿するときにはもう、上司もみんな帰っちゃってるんで。だから、とりあえずあげちゃおう、みたいな……。 (一同笑)

SNSは広報ではなくコミュニケーションツール

中尾 みずけむり展でのSNS戦略で思い出しましたが、ヨークシャー博物館が、「不気味な展示物」と題して #CreepiestObject #CURATORBATTLEってハッシュタグをつけてたんですけど、学芸員がそれぞれの博物館で不気味なものを出して、うちのほうが不気味だって競い合うみたいな企画をコロナのときにやって、ものすごくウケたんですよね。日本人も参加したりしているので、世界中に広がった取り組みになりました。

こういう使い方にしても自分のところで面白いのを発信するっていうのはあるんですけど、やっぱり他の博物館や、それこそ来館者さんが巻き込まれていくような、仕掛けを作ってあげるのも面白いことなのかもしれません。まだ日本ではあまりこういうものは見ないですね。



<https://twitter.com/YorkshireMuseum/status/1382987881279496192>

野口 まさしく山梨県と同じで、博物館・美術館が参加し、一般の人と一緒に入ってくるってことですよ。参加している感覚がたぶんとっても大事なんでしょう。特に一般人向けには。

中尾 SNSってコミュニケーションツールですもんね。広報ツールじゃない。

三好 うんうん。

野口 さっき、樋上さんがおっしゃっていた一般の人も最先端の研究をみんな求めていますよってというのは、研究の最前線と一緒にいる、進み具合を体感したいという、たぶんそういうことですね。

樋上 うん、そうだと思います。

野口 だとすると、逆にその時点で、いやこれ難しいから学会誌には出すけどSNSには出しませんってしてしまうと、その瞬間に想定していないところに届かなくなるということですね。

この点はオープン化にとっても重要な側面になってくるのかなと。このあたりを掘り下げて、耕していくと、博物館側にとっての利得もかなり見えてくる感じはしますね。

今井 つまり、一般の人たちが全国や、さらに海外の博物館で自分たちが撮りためた写真コレクションの中から、こういう写真を持ってるよっていうのがあれば、当然博物館だけじゃなくて一般の人だって参加できるわけですね。博物館で写真を撮らせるのは、結構こういう形でも大事なんじゃないかなと思うんですけど。

野口 まさにそのとおりでと思いますし、とにかくダメ、ルールとしてダメって話は別にして、図録の販売に影響するから、実物を見てほしいから撮影しないでほしいって話もありますけど、一連の話でいうと、一般の人ってほんとに物そのものの写真を撮って、それをそのまま投稿してみんなに見せたいのかっていうところにも、たぶんつながってくると思うんです。

今の樋上さんのお示ししたああい図のほうが、“いいね”がいっぱいつくのは、逆にいうと図録の代わりに写真を撮って、それがアップされていれば“いいね”がつくのは全然違うっていうことになってくると思うんで。

樋上 展示品にしても、見る人によってポイントが違いますよね。こっちが見せたい以外のところで、

発見してくれるものもあるから、それでちゃんとコメント付きで出れば、うれしいはずですね。

中尾 学芸員にとっても発見がありますよね。そんな見方があるんだっていう。

今井 こういうときに、流水文銅鐸や火焰土器が「不気味な遺物」として紹介されちゃうことには、博物館の方としては抵抗があるんですか。（一同笑）

野口 このハッシュタグで自分のところの資料を紹介されたらどうしようみたいな…。

今井 こういう、かなり呪術的な文様がついてるものを、一般の人が撮って、所蔵者と無関係に勝手に出しちゃうと、「こんなネガティブなところで使われて」というような言い方をされちゃうもんなんじゃないかな、博物館では。

野口 そうですね。國學院大学博物館の居家以岩陰の展示⁷⁾では、縄文人の骨に関しては一応私たちと同じ人であって、撮影はしてもいいけれども、遺体であるということを尊重してください、と掲示されていました。倫理というのも基準が難しくて、Aさんには倫理的にダメでも、BさんではOKっていうのはあったり。差別や遺体に関するものってセンシティブなので一定の合意の得られるラインはあると思うんですけど、國學院の場合も禁止ではなくて尊重してくださいって書き方だったはずですよ。中村さん、確かそうでしたよね。

中村 そうですね。先ほど今井さんのご質問で言う



<https://twitter.com/TORARINOFFICIAL/status/1343391974171111424>

と、おそらくこれはOKだと思います。キャンペーン自体がネガティブじゃないから。というふうに、たぶん曖昧なところがあるんじゃないですかね。博物館がっていうことでやってますよね、きっと。

野口 うん、そうですね。

中尾 もともとヨークシャー博物館が始めてますからね。

中村 日本でも、おうちミュージアムが年末からしばらくは共同で「#おうちミュージアム初詣」をやったんですよ。

中尾 あー、やってましたね。

中村 それがね、何カ月かまではお題が回って来たんですが、その後回ってこなくなって。年末ぐらいに全体でちょっと話をする機会があった中で、こういう一種のハッシュタグで月に1回何かやりませんかという話があって、3月くらいまでは提案がありました。

(追記：6月末に新たな提案がありました)

野口 こういうテーマで、っていうのはなさそうですね。むしろ個人が受け継いで、勝手にやってる感じですね、見てると。

中村 おうちミュージアム自体は継続しているのですが、さっきの初詣みたいな共通のハッシュタグでやろうという動きについては、少し間が空いています。

今井 これは、一般の人でも自分の写真で参加可能なんですか。

中村 あんまりそういうことは、当初は想定していませんでしたけど、やってらっしゃる方がいるなら良いかと思います。

中尾 昔あった「#学芸員のお仕事」や、コロナで始まった「#エア博物館」、「#自宅でミュージアム」、いろいろとやりましたが、あれはもうやっぱり学芸員以外の人も当然入ってくるんですよ。そういう盛り上がりの中で、学芸員だけでなく広がっていくっていうのはあるでしょうね。

野口 禁止しようがないですもんね、SNSでやる以上は。

中村 それはもちろん、やがてそういう人が来るだ

ろうということは想定をして。

野口 なるほど。これ、こういうハッシュタグを追っていくと見事に分かりますね、そのオープン化に積極的なところっていうのが、だいたい繰り返し同じところが出てきますから。

中村 全体として入っているけれども、こういうところに乗ってくるところと、乗れないところと。

中尾 SNSはね、結構自治体によっては使えないってところもありますからね。

今井 間違いなくこういう人たちを味方につければ、かなり流行りを起こせるというか話題にもなるし、注目もされるんじゃないかと思いますけど。例えば自分のところのアカウントのフォロワーから、この人はうまいこと宣伝してくれそうだな、という人たちを特別展の内覧会に呼んだりすることを、新聞社やテレビ局絡みのイベントではしているみたいです。博物館でもそういうことはやれるんじゃないかと思うんですけど、どうでしょうか。

SNSで展覧会を盛り上げる

野口 東博はちょっと一時代前ですけど、ブログ全盛期のころは博物館や歴史ブロガーの人たちの特別枠で内覧会やってらっしゃいましたよね。だいたい時間帯的に、レセプションまでいくところが関係者の内覧会で、その前の時間帯にブロガーの人たちを呼んで、記事でアップしてもらうのは結構やってらっしゃいますよね。で、そのときはちょっと差別化になっちゃいますが、写真もある程度許可してブログにのみっていう形でやっていたかと思います。

今井 あれはSNSになってから、あまりないですか。

野口 そのへんどうでしょうかね。中尾さんご存じですか？ SNSだと際限なく広がっちゃうからやりたくないんですよ。

中尾 私も前職のときに、SNSに投稿するのを前提にブロガーデーみたいなものを設けて、一回実験したことがありましたけど、あんまり来てくれなかったんです。宣伝が足りなかったのもあったんですけど。それから、ちょっと下火になっちゃいましたね。

インフルエンサーとか、お金とってやりますよって人は結構いるので、そういうプロモーションをやっているところはありますけどね。

今井 あー、なるほど。商売として成り立つようになっちゃったんですね。でも意図しているのはそういうことじゃないんでしょうね、きっと。

中尾 そうですね。もっと市民や利用者から自発的に広がってほしいと思ったりもしますけど。その仕掛けをどう作るかでしょうね。

野口 樋上さんが橋本麻里さんに目をつけたのは、まさしくそういう戦略だったわけですね。

樋上 そういうことですな。

今井 樋上さんの「YAYOI・モダンデザイン」展では、Twitterでの「縄文VS弥生」のバトルが面白かったですね。

樋上 あれこそ想定外ですよ。ただ「縄文はもう古い、これからは弥生だ」というキャッチコピーを考えたのは僕らですけどね。

今井 あれは、あおり文句として。

樋上 あれは、僕と陶美の総長とで考えたキャッチコピーで、それを陶美の若い学芸員さんがTwitterであげたらそれが妙にウケたんです。あのときも、結構これなんかは反応があるんじゃないかって想定はしていました。

野口 あれで盛り上がったときに、Twitterバトルで立役者だった縄文 ZINE さんが、その前に東博の縄文時代展のときも立役者というか、話題を広げたときに、東博自体からではありませんがプロの考古学者の人でちょっと縄文 ZINE さんに苦言を呈された方もいらっしゃったりして、一過性のブームに消費される的なことを言ったこともあったりもしましたが、「YAYOI・モダンデザイン」展のときは、そういう指摘や批判みたいなのはどうですか。

樋上 そもそも展覧会自体が一過性じゃないですか。(一同笑) 会期が1-2か月と決まっているんだから、その間だけでも盛り上がってくれたらうれしいですよ。

野口 まあ、正論ですよ。特にじゃあ樋上さんに

届く形でそういう批判が来たりはしなかった。それは、縄文時代展のときから時代が変わって、もうSNSは当たり前みたいになってきたからですかね。

樋上 そういうことは特にはないですね。と思います。ほんとにそうになってきてますよね。

情報を検索しない世代へ届けるために

野口 学生さんの話を聞いても、公式の、例えば愛知埋文をまず名指しでそのページを開いて見たい記事があるかどうか探すようなアクセスルートはないってはっきり言っていて、Twitter や Instagram で流れてくる記事を見て、興味を持ったら、リンクが貼ってあったらそこに行きますみたいな閲覧方法ですよ。

もうちょっと上の、30代半ば40代くらいの博物館・美術館が好きな人は、東京界隈だとウォーカープラス、インターネットミュージアムを定期的に見ます。

ただそれも検索の入力は誰もしないですよ。インターネットミュージアムを見る人も、トップからずらっと並ぶ記事を順繰りにスクロールダウンして、見たいと思ったらクリックする。とにかく話を聞いて驚くのは誰も検索をしない。そうすると結局、テキストでも画像でも動画でもまず目に留まるものを流さないと、検索をしない人たちには引かからなくて、想定外の人のところに届かせる手立てはないのかなと思っています。みなさんのお話を伺っていてもそのとおりなのかなという気はしますね。

樋上 ニコ美って画期的ですよ。実際に自分が出てみて感じましたが、他の回を見てもすごい面白い。こんな偉い先生が、こんなに喜々としてしゃべるんだっていう。例えば永青文庫の回は、熊本大学のすごい先生がこの資料はねーってうれしそうに語っていますよね。あれって、絶対一般へのインパクトは大きいですよ。やってる人はこんなに楽しんだっていうのを、身をもって発信するのは、動画ならではですよ。ニコ美はそういう点ではすごいなと思いますし、それにちゃんと食いついてくる層

がいるのもすごい。2時間でも3時間でも付き合ってくれる人はいますからね。

野口 樋上さんの回がまさにそうだったじゃないですか、あれ。延べで何時間やったんですたっけ。コメントで、樋上先生、水飲んでくださいって。(一同笑)

樋上 3時間やりました。あのとき、ずっと風邪気味でどの調子が悪かったんですよ。

中尾 学芸員ってすごく専門知識も豊かだし、普通の人と違うので面白いんですよね。テレビのマツコデラックスさんの番組でも、いわゆるオタクみたいな人を呼んでお話ししてもらったりしていますけど、やっぱりそこに特化している人ってすごく面白いので、ほんとに学芸員さんがしっかりと前に出て、魅力をふりまけばいいんですよ。プラタモリもそういう人気があると思うんですね。

ニコニコ美術館もそうですが、東博のYouTubeサイト、コロナになって結構盛んにアップするようになったんですけど、学芸員さんが見てもらえなかった展示を語る動画が、アップされて1週間でそれまでの動画をずば一と抜き去って“いいね”がたくさん入りました。物を丁寧に見せるいわゆるナレーション的なものよりは、学芸員自身がこれすごいでしょって見せていく、熱が伝わってくようなものがすごく魅力を感じていただけるんだろうと思いますね。

樋上 それって、研究と全く一緒ですよ。

僕は、やっぱり書いている人がこれ面白いって思って書いた論文は絶対読む人に伝わるし、それって展示と全く一緒だなって思いますよね。

中尾 そういう部分を隠そうとしてお行儀よくやっちゃうよりかは、もう思い切ってこんなに面白いんですよって普通に友達に語るようにやればいいんだと思います。

ライブ感が大事

野口 先ほど共有したこの学生のご意見のまさにこの部分ですよ。同じ学芸員がしゃべっても、中止になって絶対に見せたかったのに、って熱く語った

り、あるいは樋上さんみたいに1時間ぐらいの予定だったのが3倍もしゃべり足りないから全部しゃべります、みたいな内容だったりすると聞いている側もこれは、と思う。もうひとつ思ったのは、三好さんのところやニコニコ美術館もそうですが、リアルタイムでコメントが流れると、全部じゃないですけど橋本さんや樋上さんが拾って、これはこうですよってその場で返事が返ってくる。

三好さんのみやがわ考古民俗館のときは、そこをもっと見たいって言うとかメラが寄ってくれるみたいなライブ感って、たぶんすごく重要で、ライブ配信が好きな人たちに届くのだと思うんですよね。YouTube Liveやインスタライブで配信している人たちで、コメントすると反応してくれるから、ただ流れてくる動画を見るんじゃなく、ライバーの動画を見る人たちが30代ではほほいなくて、20代から10代。新しい文化ですよ。古墳の、はにコットの人たちでも古墳ライバーをやってる人たちがいますよね⁸⁾。

中尾 17ライバーね。

野口 うん、そうそう。だから三好さん、八尾市しおんじやま古墳学習館の福田さん、樋上さんがやっていたのは本人にその意識はないけど、見る人は考古学学芸員ライバーだと思ったみたいな受け止めもあったかもしれませんね。

樋上 でもたぶん、みんなそういう部分ってあるはずですよ。その展覧会、自分で企画してこういうのやりたいって思いは、少なからず誰にもあるはずなんで、そこをまあ恥ずかしげもなくやるかどうかだけのことかなって気もしますけどね。

野口 考古学じゃないですけど、大阪の民博の池谷和信先生って人類学・民族学の先生は関わった展示のときに超熱く語る展示解説をされるので、固定客がついてらっしゃるそうですよね。ちゃんと図録を買おうと、池谷先生の文章がそのまま載っているんだけど、そうじゃなくて、あのしゃべくりを聞きたいという。学芸員もほんとにそういう部分をもっと出していくべきではないか。博物館学芸員に限らず埋文のほうでも名物現説みたいなのはあって、そうす

るともっと人が来るだろうし、その名物現説をそのまま今度は YouTube にも流したりみたいな、そういう取り組みがこれから必要かもしれないですね。

中尾 ほんと、学芸員って博物館の一番大きな資源やと思いますよ。

野口 いい感じにきましたね。つまり、データや資料をオープンにするのは実は、目的なんだけど手段としてはただ公開すればいいだけでなく、付加価値をつける。付加価値をつけられるのは人間、専門家、研究者、学芸員、そういう感じでまとめるときれいですかね、中尾さん。

中尾 (笑)そうですね。みんな、資料や博物館が好きな人が働いていますから。やっぱりその、好きだっていう思いをちゃんと伝えればいいし、好きって伝えるために何をすればいいかを、みんなもっと考えたり、意識すればいいだけかもしれないね。

研究者も組織以上に個人で発信していく

高田 冒頭で、今井さんが新聞社のほうの記者さんも個人名の Twitter を始めた。たぶんおそらく文化財業界も専門性を追求していくのであれば、そうなるんじゃないかな。というのは、これからデジタル時代が進んでいけば、個人の専門性が強くなって、最終的に組織では働くけど個人の専門性が問われる仕事をやっていく方向になる。学芸員は文化財の専門家なので、自分の責任において文章を書いて、自分で情報を発信していく方向にたぶんなるんです。もう、組織の看板の中でやるってふうにはいなくて、どんどんオープンになっていく。専門家であれば、SNS を個人名でやるのは必然の流れかなと思っています。

で、さっきの写真掲載の問題も、まず SNS を館としてやるためには、おそらくセットとして写真掲載も館としてオープンにしておかないと成り立たないですし、写真掲載をオープンにさせるためには、おそらく館がデータのオープン化のマインドがないとできないので、たぶん全部つながってると思いま

す。実はそういう意図で、江上さんの報告も奈文研のデジタルアーカイブ課程でしゃべってもらった内容を、原稿にしています。

これは頭の体操ですけど、仮にウェブでも情報を館として出さない、SNS はもちろん反対、館としてやらない、来館者に写真も写させない、SNS にもアップさせない、って館がもしあったとしたら、まあこれからデジタル時代どうなるか、明るい未来はないんじゃないかなという感じがするので、もうオープンでやってくしかないんじゃないかなって思ってます。

野口 そうですね。オープンにしないところがあったら話は、頭の体操じゃなくて実はすでに起きていることで、私も昨年非常勤で授業担当させていただいたところにきていた、M2 の学生さんは修論のテーマ変えざるを得なかったんですけどね。図書館も閉まって資料見学も行けなくて、そうするとネット上で PDF がより公開されているところに選択肢を持たせざるを得なかったことで、このままコロナ禍がどこまで続くかわかりませんが、もう今博物館や埋文センター側が意識してなくても、取捨選別は始まっていて、物理的にというか現実的に使ってもらえないわけです。これをどれだけ意識されているかは結構大きいですよ。

高田さんのお手元でも、間違いなく 2020 年の 3 月 4 月以降、総覧全体のアクセス数とダウンロード数がもう右肩上がりなわけですよ。

高田 劇的に上がってますね。

野口 実はあの時期に知り合いの埋文担当者の SNS を見ていると、休館になったり、普及事業ができなくなったので、今のうちに PDF をアップしますってところが結構出て、出したところは確実にアクセス数を稼いでいるというのがひとつある。

もうひとつは、個人の責任で出すってところは、重要な指摘だなと思って。ほとんどの方は研究者でありかつ学芸員なり埋文担当者であるときに、論文を書くときはやっぱり個人名で個人の責任で出して

いますって人がほとんど。というか、組織として出すということはほぼほぼない。じゃあこのSNSの発信や写真その他を出すときには組織の人になっているっていう二面性・二重性をどう考えられるのか。

SNSでは公の顔、論文のときはプライベートの顔というところ、個人と組織の間での立場で三好さんから順番にコメントを。

個人と組織の間で

三好 僕は、組織名で出すのはSNSで厳しい状況に個人がなったときに、組織として守ってあげてことを考えてと認識しています。なので、個人名じゃなくて一応組織のアカウントって理解なのかなと。ただし、有志での発信と位置づけています。

あと個人で論文のところですけど、飛騨市ははっきりしていて、所属名の、飛騨市教育委員会の三好清超で論文を書かせてもらうときは、公務で勤務時間内に書かせていただけます。おそらく市町村ではあまり多くないと思っています。

一方で自分の研究を文章化するときは、三好清超で投稿します。受け取ってもらえるかどうかは個人名で勝負するので、そこは個人で論文書くときと組織の人として論文を書くときとで明確に分かれています。SNSの場合と論文の場合は、一応今のような理解で、現在は対応しています。

中村 因みに、この座談会はどうですか。

三好 これは、今回は飛騨みやがわ考古民俗館の事業に伴って誘っていただいているということで、公務の延長で対応をさせていただいています。今回の協会は公務での形でした。

組織として論文を書くときの話で、今現在国指定を目指して発掘調査を行っていることに関して依頼があって、報告書前に情報を出させていただくことがあります。それはもちろん載りますし、それ以外にも仕入れた情報を論文の形で、事実報告の延長ですけど、出させていただくことがあります。それは、報告書の前の段階でいろんなご意見をいただいて、報告書に反映させたいという思いでやっています。

僕と一緒に調査にあたっている中世史の専門の学芸員らも含めて、一応そういう形でやりたいのを委員会でも飛騨市としても認めていただいて、やらせてもらっている事実があります。

野口 ありがとうございます。中村さんは大学なのでちょっと組織との関係が、他の方と違うところもあるので先に堀木さん、お願いいたします。

堀木 私、なかなか研究っていっても出すところがないのですが、だいたい個人的に書く文章に関しては、中身はほとんど職務のことしかないので、全くの個人っていうのは私の立ち位置では滅多にないです。ただ、じゃあ私の書くものすべてを上司に見せているかという、そうでもなかったりするところがグレーだったりするんですけど、しゃべっているのは全部公務に関わるものなんですけどね。そういう曖昧な立ち位置を個人的にはとっています。

野口 堀木さんの、ここまでOK だろうという感じで組織人としてやっている感じ。

堀木 そうですね。だいたい個人的にはやるんですけど、だいたいどこかに必ず公務のほうでも出しているデータでしかほぼお話をしてないので、誰かに何かを突っ込まれても、いやうちのほうでもちゃんと出しているからっていう言い訳ができるように整えて、世の中に出します。

野口 なるほど。樋上さんは、どうでしょうか。

樋上 SNSに関していえば、うちの公式 Twitter は一日一回が原則で誰か日替わりで、自分の回以外のときは勝手に自分のアカウントでしゃべってます。で、それはもう、趣味からそういう研究に関わることまで、割となんでもかんでも個人の Twitter カウントでしゃべってる感じですね。研究に関してはほとんど個人です。あまり組織としてっていうのは自分の中ではないですね。

野口 中尾さん、たぶん両方の、弥生博のときのと、今の文化庁でふたつあると思うんですけど。

自分の名前で出せることがいい仕事につながる

中尾 まあ今の状況って、よくわかんないところも

正直まだあるんです。さっき Facebook の個人名を書いたときに言いましたけど、もともと SNS 自体が個人間のコミュニケーションがとれるツールだって捉えたのがありますし、業績の話にしても、組織の中にいる、人という資源を隠しちゃうのはなんでなのかなって。慣習的な部分で、名前を出さないのが公務員の世界では結構あることはありますけど。

でも今、一人一人が担う仕事もすごく多くなってきている状態の中で、その仕事に敬意を払う意味でも評価されていくべきだと思いますし、また逆にその発信する側としては、自分の文責も意識すべきです。名前を隠すことの弊害のほうが大きいんじゃないかなと。

実際に名前を出すからこそ、しっかり書こうと思いますし、やっぱりそこに対して評価が得られればうれしいのがありますよね。例えば論文を自分の名前出さずに組織名だけで書いてしまうと、自分のものと捉えられないと思うんですよ。

それをする事で論文の質が変わってくる可能性もありますし。自分で書いたものであるなら自分の名前を出せるのが、ごく自然なことだし、結局いい仕事につながっていくのかなというふうに思ったりもします。

野口 ありがとうございます。高田さんはいかがでしょう。

高田 ちょっと大きな話なんですけど、博物館の在り方がもう経済成長や人口増加が前提の昭和と違って、もう入館者数だけで指標になるような時代じゃないと思っています。人口減少や経済が弱くなっていきお金が無くなっていく中で、博物館の社会的意義・存在意義も変化するのは必然でしょう。そんな環境ではより専門性を打ち出さないと残っていけないと思っています。同じく図書館業界も社会変化の中であって意義を問われていると感じます。すでに図書館司書の3人に2人は非常勤と言われています。分野に限らず、皆さん、専門職としての矜持があるはずですよね。先ほどの樋上さんの Twitter のご紹介のように、社会的理解が得られなかったら、社会

に専門職の居場所がなくなってくるわけで、文化財業界は単なるモノの倉庫番にしかならないかもしれない。

そういう上で、今の時代デジタルですし、SNS ってひとつの有効な武器なので、これを使ってどんどん専門性をアピールしていく。もっと言うと、個人の専門性をどんどん PR していくのが、業界全体の生き残る方向性かなと思っています。

今日思ったのは、そうはいっても文化財の専門家自身が個人で発信すると、必ず失敗しちゃう人が出てきて、失敗するとダメだから、だからやめようみたいなことになる。そうするとやっぱり教育、やってはいけないこととベストプラクティスをより広げるのが大事かなと思いました（2022 年 6 月、奈良文化財研究所では「奈良文化財研究所ソーシャルメディア・ガイドライン（役職員対象）」（<https://www.nabunken.go.jp/info/law.html>）を策定しました。「社会の自律した構成員として、自由な言論活動・調査研究活動・コミュニケーション活動は尊重されるものであるが、有用である一方、意図しない問題を起こす可能性があることから、ソーシャルメディアの特性や社会的規範を理解し適切に利用していく」ためのものです。）。

なので、奈文研の研修でも例えば SNS と文化財発信、情報発信みたいなのもひとつのものとしてやってもいいかなと思いました。そのときにファラ尾さんをドキュメントとして、引用できる形でちょっと残したいと思いました。そうになったらご相談します。（一同笑）

中尾 自由に使ってください。世に出ているもんですし（笑）。

SNS での情報発信論をアップデートする必要性

野口 ありがとうございます。今ひとつ拾っておかなければいけない重要なことは、教育の話が出て、たぶん今まで全然それを議論してなくて、どちらかというと今日集まっている人たちは、インターネット SNS に通じている、いわゆる情報強者、情強的

な人が多いですけど、必ず個人だと失敗する。それはなぜかという大学で専門の訓練を受けているときに、この話は一切なかったですね。世代によっては著作権の話すら聞いたことがない。私の世代ははっきり言って博物館実習や学芸員のときに著作権の話は、ほぼほぼなかったです。中尾さん、ありますか。

中尾 なかったですね。

野口 ないですね、世代的に。そういう時代なので、これは早急にリカレントっていうか、今、職についている人にも研修で情報を伝えていくのは確かに重要ですね。

中尾 クリエイティブコモンズライセンスを全然知らないのは不思議ですね。日本での普及が、あまりにも遅れているのがすごい気になっています。

英語で書かれちゃっているというのもあるんですよ。この間でも、オープン化の話を書いた後に、クリエイティブコモンズを初めて知ったって人がいらっちゃって、えーって思ったんですけど、でもそれが現状なのかなと思ったりしながら。

野口 一方で行政オープンデータの関係で政府標準利用規約 2.0 というのは、たぶん本庁の総務や情報システムにいらっしゃる人は絶対知っているはずですから、そういう意味で文化財、博物館や出先機関であったり、あるいは本庁の中にも交流が少なくって、かつ人事異動がないから知る機会がないっていうのは、たぶんすごく影響していて、尚更だから文化財・考古学の学会や組織の中でリカレントの場を設けていかないと永遠に取り残されちゃう感がありますよね。

中尾 著作権は、実態的には規制のほうに向っちゃうことが多いんですけど、クリエイティブコモンズに関しては、規制じゃなくて活用促進のほうの仕組みだと思うので、これに関しては情報発信する組織とその構成員は知っとくべきだと思うんですよね。

まだ博物館でも CC 表記しているところって非常に少ないですけど、こういうのをつけていかないと

使う側も、どこまでの範囲で使っていいかわからないって問題があるので、利用条件の明示として使えるんだっていうことはみんなに知ってほしいと思います。

野口 奈文研の研修でも、今表示しているようなものは、東大から今慶応に移られた福島さんを講師に呼んで、実習まで自分たちで、インターネットでいろんなところの規約やライセンスを調べて、何がもっとも適切なのかって自分たちで考えましょうっていうものをやってますけど、やっぱり最初から知っている方って少ないですね。クリエイティブコモンズでも。

実習を通じて、意味をようやく知る。だから文字で知るだけじゃなくて、なぜそれが必要なのか、それがよいのかは、実習を受けないと理解が厳しいのになって感じですね。

では順番的に最後になっちゃいましたが、未来の教育、今の話題がすべて大学にかかっているという流れで、中村さんに振ってもよろしいでしょうか。

中村 私も組織として SNS を出していることもありますので、授業で得た情報をもとにして書くときは、やっぱり気にしますよね。すべてを上に見せているわけではありませんけども、気にはしているところはあります。

博物館の授業では、私は直接出すところでは話していますが、情報メディア論というのがありますので、大丈夫なはずですよ。

授業は分担なので詳しくはわかりませんが、著作権はやってますが、クリエイティブコモンズはやってるかどうか。ただ学生たちは多くの博物館が SNS をやっていることや、それが必要であることも知っていて、どういうものがあるのかをその中で見ていくことが必要だと思っています。

博物館側から見たときにどういうものがあるのかってこともそうですし、受け手の方からどういったものがウケるのかと。堀木さんのデータもありますけども、私の授業では、現段階で 18～20 歳くらいの年齢で、どういうものがあるのかと思うのかと聞くこ

とはあります。3D化をやる前の段階で少し調べさせて、やっています。

今日話を聞いて、そこでさらにもう一步踏み込んで、どのように出すかですね、今のような権利の問題も、一般論では話をしていますけど、いろんなやり方があるわけですね。SNSだけじゃなくて、ストリートビューや、動画もあるし、おうちミュージアムに限っていてもいろいろな方法で出しているので、それぞれの、いろんな方法があるってことは学生たちも認識しましたが、実際に調べてやってみるという中で、何が問題なのか、ひとつひとつ確認を、まあ全部できるかどうかかわからなくてもしていくことで、やがて今の学生たちが現役になるころにはたぶん別のシステムや方法でやっていくと思いますので、そういうことに気づいてもらえるようなものができればなあというふうには思っています。やっているとすし、今もやらなきゃいけないなと思っています。

野口 ありがとうございます。予定調和じゃなく何かうまいこと、写真や基礎情報の公開と言いつつも考古学・文化財情報のオープン化は、最後はやっぱり人のオープン化、人がオープン化しないと始まらないという形で見事にまとまって、それを将来世代に向けて教育をどうしていくかってことと、今現役の人たちがどう意識を変えていくかという話になってきたのかなと思いましたが、どうでしょうか。

今井さん、ここまで長くお付き合いいただいて、何か思ったことがございましたら、ぜひ。

専門性=価値をアピールしていくことが必須

今井 先ほどから伺っていて、SNSを個人が自分の名前でやる、まあTwitterに関しては匿名性の問題があって、ちょっとある意味無政府状態になってしまっている部分がありますが、その中で自分の名前をちゃんと出して発言する人の発言には、やっぱりみなさん一目置いていると思うんですね。その意味でも発言する場合に個人名でするのは大切なことだと思いますし、さっきおっしゃった専門性というものを

を前面に出していく、自分たちの価値をアピールしていくってことを考えると、たぶん学芸員の人たちにとってみては、これからはそれが必須になってくるんだらうなってことを、今あらためて思いました。

で、テレビを見ていて磯田道史先生、それから奈良大の千田嘉博先生ですね。だいたい中世戦国の話になると、民放もNHKもあの人たちを使うのは、専門性とタレント性を両方持っていて、すごくテレビ的に「撮れ高」が高い人だってことがわかっているからだと思うんですね。でも、ああいう一人、二人の人にいろんなものが集中しすぎちゃうのもどうかと思います。ぜひ、いろんな専門性を持っている人がもっともっとテレビに出て、やっぱりこの分野はこの人だよ、という人が出てくようになればいいなと思います。歴史や考古学の研究者で、このテーマだったら誰に聞けばいいのかってことは、当然僕ら文化財記者は知っているわけです。でも「Twitter民」たちが、こういうニュースのときにはこの人が何か面白い情報を発信するはずだとフォロワーになって、実際にニュースがあったときにチェックしたら、今日はこんなこと書いてるわ、ってなるようになれば、一番理想的なのかなと思いますし、ぜひそういうふうになっていてもらいたいなと思います。

野口 ありがとうございます。今の話でいうと考古では最近松木武彦先生が自分でも役割だと思ってやっていたいるんだと思うんですけど。

今井 そうですね。あと、東京から呼びやすい場所にいらっしゃることもあるんでしょうね。

野口 佐倉からだからすぐっていう。松木先生がスタジオで一番いい古墳は何かみたいな話をしていたときに、Twitterを同時的に見ていたら、あのとき個性的な学芸員というか担当者がいっぱい出てきて、みんなが熱く古墳について語ることに反応しているツイートも多かったですね。

樋上さんのニコ美もそうですけど、最後はやっぱり人に対する信頼感というか、専門家としての信頼感みたいなものがこれから重要になってくるのかな

という感じでした。それでは時間になりましたので、いったんこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

【補註】

- 1) パブリックドメイン：著作物等について著作権が発生していない、または消滅した状態にあるもの。「顔真卿自書建中告身貼事件」（最高裁昭和58年（オ）第171号）がしばしば参照される。
https://www.courts.go.jp/app/files/hanrei_jp/181/052181_hanrei.pdf（2022年11月15日閲覧）
- 2) 公正利用。アメリカ合衆国著作権法などでは著作権による利用制限の及ばない利用について概念化されている。日本の著作権法では利用可能条件が個別に示される形式をとるのでフェアユースの概念自体は規定されていない。
- 3) NBDC「データ共有の基準としてのFAIR原則」
<https://biosciencedbc.jp/about-us/report/fair-principle/>（2022年11月15日閲覧）
- 4) 石井淳平 2020「博物館職員が文化財情報の利用を制限する前に考えておくべきリスク」『考古学・文化財のためのデータサイエンス・サロンonline 予稿集 #5』：46-50 <http://doi.org/10.24484/sitereports.88607-693>
- 5) 株式会社 シャープ https://twitter.com/SHARP_JP
- 6) ニコニコ生放送「「YAYOI・モダンデザイナー ニッポンの美、ここに始まる―」（愛知県陶磁美術館）を巡ろう【ニコニコ美術館】」 <https://live.nicovideo.jp/watch/lv328837719>
- 7) 國學院大學博物館「開催終了企画展「縄文早期の居家以人骨と岩陰遺跡―居家以プロジェクトの研究成果―」【会期：2021/3/4～】」 http://museum.kokugakuin.ac.jp/special_exhibition/detail/2021_jomon.html（2022年11月15日閲覧）
- 8) 古墳ふえすはにコット on 17LIVE <https://17live/ja/profile/r/11704088>